

雪宝頂

靈峯



日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

天府の靈峯 雪宝頂

日中四川雪宝頂合同登山隊
報告書



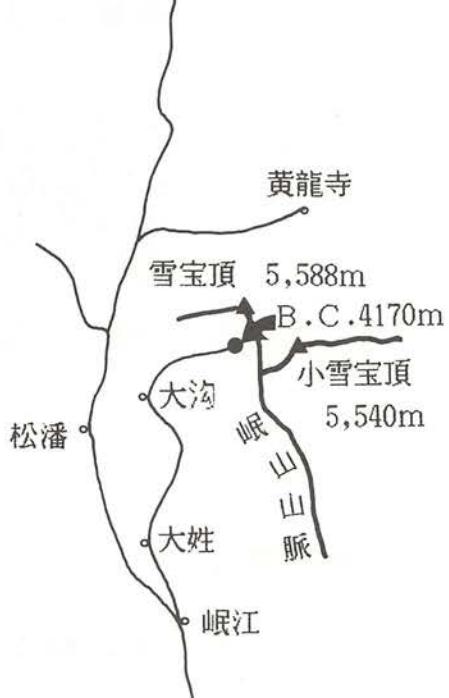
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN
日本ヒマラヤ協会

雪宝頂周辺概念図

四川省は、古来より、「天府」と呼ばれた物産豊富なところで、省都・成都は、その昔「錦城」、「芙蓉城」と呼ばれていた。

有名な“三国志”的舞台になったところもある。

雪宝頂は、四川省の北、阿坝藏族自治州松潘県にある岷山山脈の最高峰である。



目 次

四川省・雪宝頂 概念図	(2)
報告書発刊にあたり	登山隊隊長 遠 藤 登 (4)
(中国語報告)	(5)
序	日本ヒマラヤ協会 専務理事 稲 田 定 重 (6)
「四川之夏」	作詞 福山 信 (7)
岷山山脈最高峰 雪宝頂 5,588m カラー	(9)
計画概要	(10)
行動計画	(18)
食糧計画	(21)
装備計画	(22)
医療計画	(23)
準備日誌	(24)
行動記録	(25)
アプローチ	森山 公美丈 (26)
登 攀	中岡 久 (28)
第一次登頂記	大金 信夫 (32)
第二次登頂記	福山 信 (34)
登山を終えて	菅原 和明 (36)
III 隊員プロフィール	三好 喜代美 (39)
IV 隊員紀行	(45)
処女峰に登った女傑	王 馬 特 (47)
中日合同雪宝頂登山の印象	羅 凡 (48)
タクティクスについて	八木原 圭明 (52)
雑 感	中岡 久 (53)
松潘の名峰、雪宝頂に登頂して	森山 公美丈 (54)
中国朋友	福山 信 (55)
アキレス腱切断 残念！！	松館 正義 (56)
大寨郷にて	天城 敏彦 (57)
視野が開けた遠征	菅野 千尋 (58)
中国の思い出	菅原 和明 (59)
日中合同登山隊	三好 喜代美 (60)
初めての海外登山を終えて	大金 信夫 (61)
ご協力者名簿	(62)
編集後記	(63)

報告書発刊にあたり

日中四川雪宝頂合同登山隊隊長 遠藤 登

1986年夏の日中四川雪宝頂登山に際しましては、各方面の方々から暖かいご支援とご援助を賜り誠に有難うございました。厚く御礼申し上げます。

既にH A J会報第177号でその行動概略につきましてはご報告申し上げました通り所期の目的である未踏の靈山「雪宝頂」への登山も日中両国隊員13名によって初登頂がなされ、しかも短期間のうちに無事登頂できましたことは日中両国関係各位の力強いご協力の賜であり、同時に両国隊員の一致協力した努力の結果であると感謝申し上げます。

それにもまして全員無事に、しかも楽しい中に友好を深め親善交流ができましたことを隊長として何にも優る喜びとするものであります。

今回の合同登山を実施するにあたり、言語、民族、生活習慣、宗教等異なる文化の中で育った両国の隊員が寝食を共にし、しかも未踏の山に登るということが、果して上手にできるものだろうかといった心配を持っておりましたが、この問題も登山の日を重ねるとともに旧知のごとく仲良く楽しく登山が行われ親善交流を深めることができましたが、これも登山という共有の体験をすることによって相互理解が生まれた結果であると確信するものであります。

スポーツは文化の中でも、世界どこの国へ行っても同じであり同質文化であります。それぞれの国が持つ伝統文化を理解することは、その知識を必要とし、お互いにそれを理解し合うにはなかなか困難なものがあると考えますが、同質の文化であるスポーツは同一の価値観で評価され同一の理解が

なされるものと考えております。

この様な意味からも今回の合同登山の持つ意義は、両国の文化の交流の一つとして、また両国登山界の今後の交流親善のためにも意義ある登山であったと位置づけております。

もう一つの喜びは全員が無事で登山を終了できることであります。何事もなく無事帰ることは、極、当たり前の事なのですが、海外登山におきましては世界の中に残された山々の多くが険しく厳しい登山をすることが多くなっており、非常に高い率で事故が起きているのが現状です。この様な中の合同登山であり、一つの事故も許されるものではないと心に誓っておりましたが、優秀な隊員諸君のおかげで何事も無く終了出来、その嬉しさを噛みしめております。どんな小さな山でも事故は起きる可能性を持っているのが自然であり、登山の宿命であると考えますが、避け得る事故は避けなければなりません。

それには登山に於てリーダーは、判断し、決断し、実行する上で情に溺れること無く勇気をもって処理することが必要な条件であると確信いたします。今回の登山におきましても、隊員一名をアタックメンバーからはずす決定をしました。できるなら全員登頂に優るものはありませんが、無事下山のためには断腸の思いの決定であります。隊長として至らぬ点を反省すると共に、彼の隊員の今後の飛躍を期待するものであります。

最後に重ねて、関係各位に感謝申し上げ、報告の一端とさせて頂きます。

(日本ヒマラヤ協会副会長)

正当报告书发刊之际

日中四川雪宝顶联合登山队队长 远藤 登

1986年夏天，在日中联合攀登四川雪宝顶之际，感谢各方面先生们的热情支持和援助，在此谨表谢意。

正如已发表的HAJ会报第177号对这一活动概略作出的报告中所述的那样，这次活动的目的，攀登未被征服的灵山‘雪宝顶’，是由13名日中两国队员首次进行攀登的，而且在短时间内便顺利到达顶峰，这是日中两国有关的诸位先生大力合作的结果，同时也是两国队员团结一致努力的结果，十分感谢。

加之全体队员都能安全返回，而且在愉快的气氛中增进了友谊，进行了友好交流，作为队长，没有比这更令人高兴的事了。

这次进行的联合登山活动，在语言、民族、生活习惯、宗教信仰等不同的文化环境中成长起来的两国队员共同起居，攀登的又是未被征服的山峰，我曾担心能否顺利完成。这一问题随着登山的日日夜夜而得到了解答。大家象老朋友似的友好、愉快地进行了登山活动，加深了友好交往。我相信，这是从共同的登山体验中产生出相互理解的结果。

体育在世界任何国家都一样，是属于同一范畴的文化。我认为了解不同国家的传统文化，需要有一定的知识，而要达到相互了解是很困难的。但是，对体育这一同一范畴的文化，可以用相同的价值观加以评价，产生出相同的理解。

从这一观点来看，这次的联合登山活动是两国文化的交流之一，而且为两国登山界今后的友好交往打下了基础，具有重大意义。

全体队员都能安全返回也是一件令人高兴的事情。不发生意外安全返回虽然是理所当然的事情，但世界上未被征服的山峰中很多山峰地形险恶，攀登起来十分艰险。现在，在国外进行的登山活动，事故的发生率非常高。联合登山活动就是在这种情况下进行的。我暗自下决心，决不允许发生任何事故。在诸位优秀队员的共同努力下，能够不发生任何意外结束这次活动，给我带来了无限喜悦。当然不论山峰多小都有发生事故的可能性，我认为这也是登山活动的宿命，但是能避免的事故就要尽量避免。

我坚信，为此领队在下判断、作决定、实行时不感情用事，果断处理是登山的必要条件。这次登山我就从突击队中撤下了一名队员。如有可能，全体队员登上顶峰是最令人高兴的事情。但是为了保证安全下山，我还是忍痛作出了这一决定。我作为队长，在对不周之处进行反省的同时，也期待着今后那位队员的飞速成长。

最后，再次对有关方面的诸位先生表示感谢。报告暂且到此结束。

(日本喜马拉雅协会副会长)

序

85年7月、ラサからの帰路の成都で四川省登山協会との協議がもたれた折、鄭副主席から雪宝頂合同登山が提案された。

天をつくピラミダルな雪峰、近くには、九寨溝や黃龍寺のこの世のものとも思われないような景観があり、しかも岷山の最高峰で未踏。高度が若干低いとはいえ、すばらしい価値を持った山であると即座に判断した。

鄭さん、馮さんをはじめ、四川の方々とはその後何回も会うことになったが、どこか日本人に似ていて、肩ひじはらずにつきあうことができ、今も懐かしく思い出される。四川省登山協会としては、初めての外国との合同であり、随分と気を使い無理をしたのではないかと考えている。

鄭さんも馮さんも登山終了後間もなく登山協会を去られたと聞き、感無量の想いがする。機会があったらまた天府の地を訪れて語り合いたい人達であり、H A Jとして忘れてはいけない人達だと思っている。

忘れてはいけないと言えば、ナンガバルバットに逝った角田不二氏もその一人である。おそらく岷山に入った最初の日本人登山者であり、雪宝頂の礎を築いたのは彼であった。今回の成功を心から祝福していることであろう。

登山隊は、遠藤隊長を核にうらやましいほどのチームワークのもと、四川の仲間達と心暖まる関係を結び、すばらしい時を過ごしたという。通訳の羅さんが「ヒマラヤ」に寄せてくれた一文は、見事に隊の雰囲気を物語っている。

H A Jは、これまでに数回の合同登山を経験してきたが、その中でも双方の呼吸が

ピッタリと合致した点では最高のものであったように思われる。もちろん小さなトラブルはどの合同登山にも付きものであるが、それを乗り越えることによって更に大きな友情と相互理解を育ててきたと考えている。割と気楽に合同に取り組めるのはH A Jという組織が持つ柔軟な思考様式と樂觀性の故であり、この点は今後とも大切にしていきたいものである。チベット、インドとの合同隊も間もなく実践されるし、この先、幾つもの合同隊が企画され、ヒマラヤ諸国とのきづなを更に深めていくものと考えられる。

いつも言うことだが、H A Jの遠征に参加したメンバーは、一回きりに終わることなく、次々にステップを踏んで高みを目指して歩んでいる。冬季8000M峰のメンバーもこのステップの中で成長してきた。雪宝頂の仲間の間でも次の計画がささやかれ、また、更に大きな計画に身を投じて頑張っているということは誠にうれしい限りである。

岷山、大雪山、その他、ヒマラヤ主脈から離れた地域には知られざる山々が沢山ある。これらの地域を究め尽くすこともH A Jの今後の一つの方向であると思うし、H A Jなればこそできることもある。活動のフィールドは無限である。

終わりになるが、今回の遠征では、国内、国外の多くの方々にご支援をいただいた。記して、深甚の謝意を表すものである。

1987年6月

日本ヒマラヤ協会

専務理事 稲田 定重



四川之夏

作词：福山信

红色盆地 峻岭的雪 融化滔滔流
芙蓉花盛开在这天府之国上
啊啊 四川之夏来到了
我们住在日本 各位怕我们看不到大熊猫故乡
特意为我们开放了联合登山队
啊啊 亲爱的四川 我要再来
再来您的怀抱





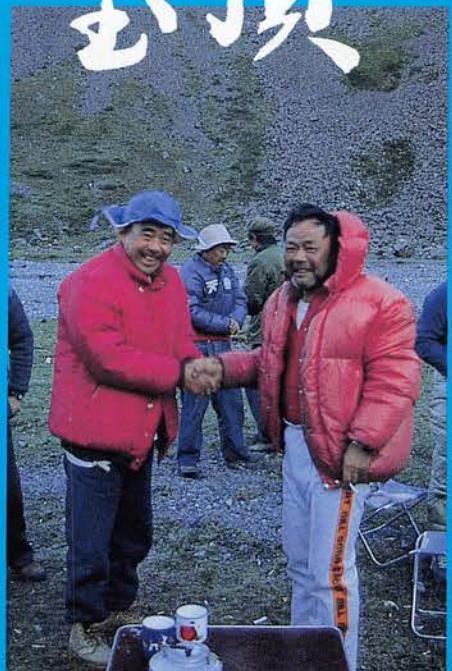
雪宝頂

岷山山脈最高峰

5,588m



中西入



1986年8月5日午前8時13分
1次アタック隊、処女峰に立つ。

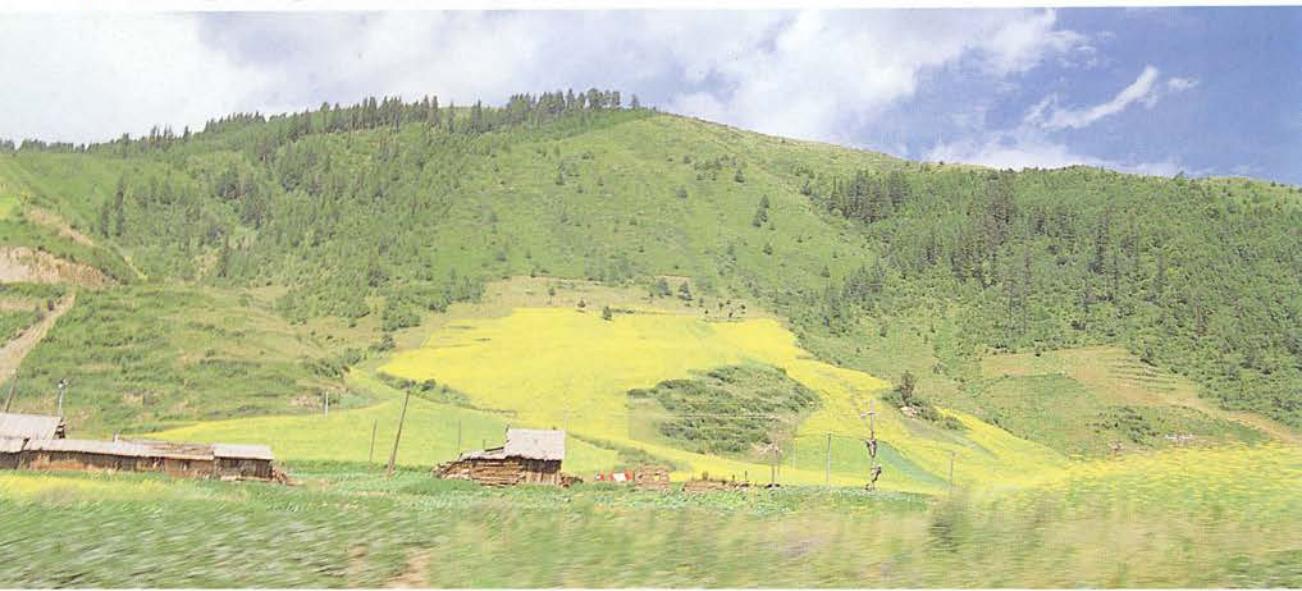


(9)



▲四川省登山協会で隊荷を積み込む。(7/26)

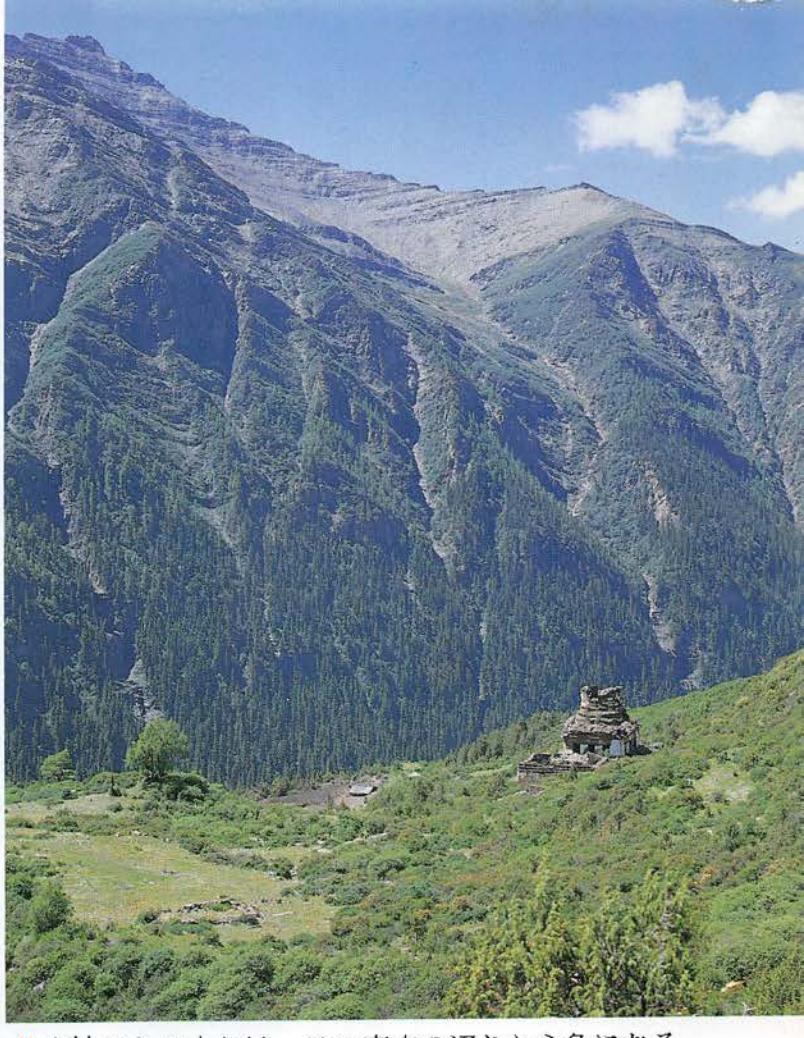
▼理県を過ぎた辺りは、菜の花畠の春だった。(7/27)

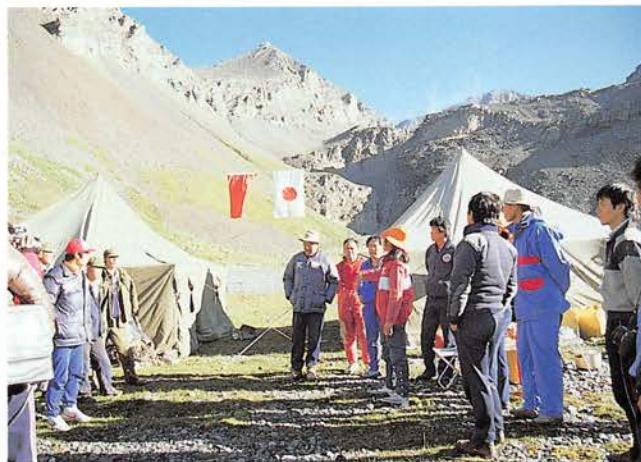


△松潘の招待所に掲げられた雪宝頂の絵。(7/29)
◆大沟から望むピラミダルな雪宝頂の頂。(7/30)



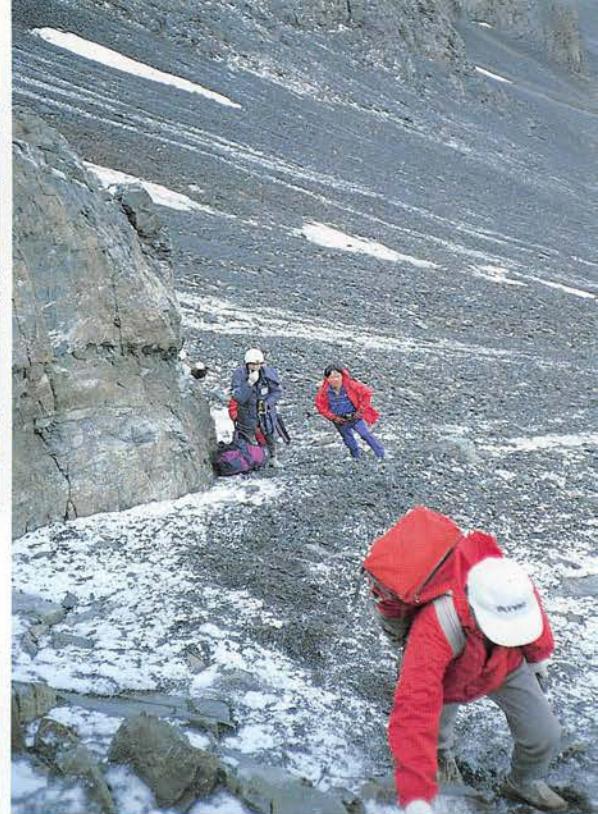
黄龍雪寶頂 岩峴勢無窮，高凌世界外。
精瑩凝太空，寒沕群山中。





▲BC開村式。(7/31)

▼高度5100mの雪稜のとりつきにC 1を建設。
明日から頂上アタックが始まる。(8/4)



▲落石が激しく、後続は岩陰で待避。(8/2)



▲岩はもろく、ハーケンも効き難い。(8/4)



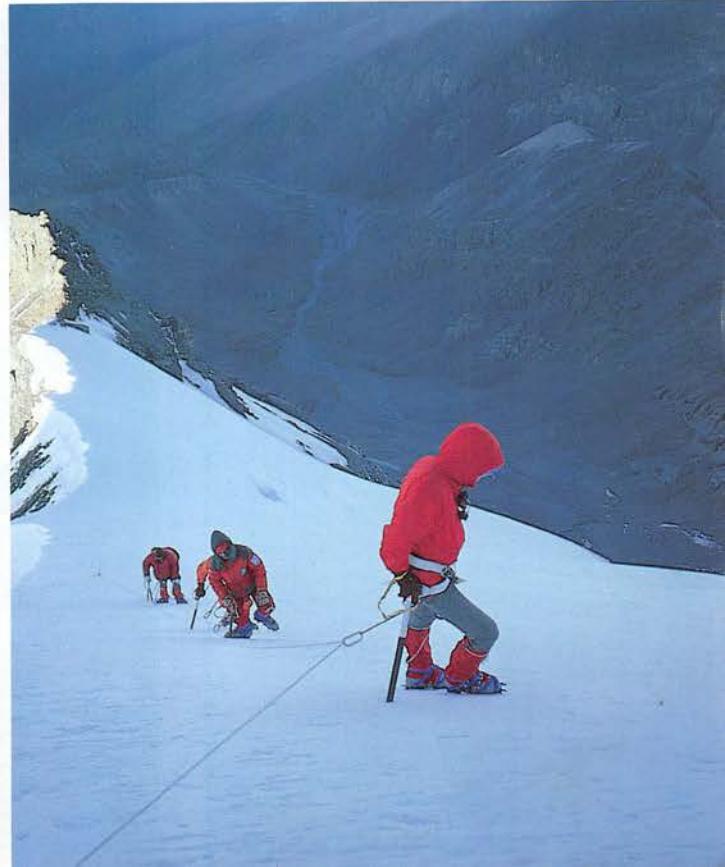
▲ガスがわき上がり、雪稜がはっきりわかる。(8/5)

▼2次アタック隊の出発。(8/6)



▲C 1で現れたプロッケン。(8/5)

▼モレーン上のBCがよく見える。(8/6)





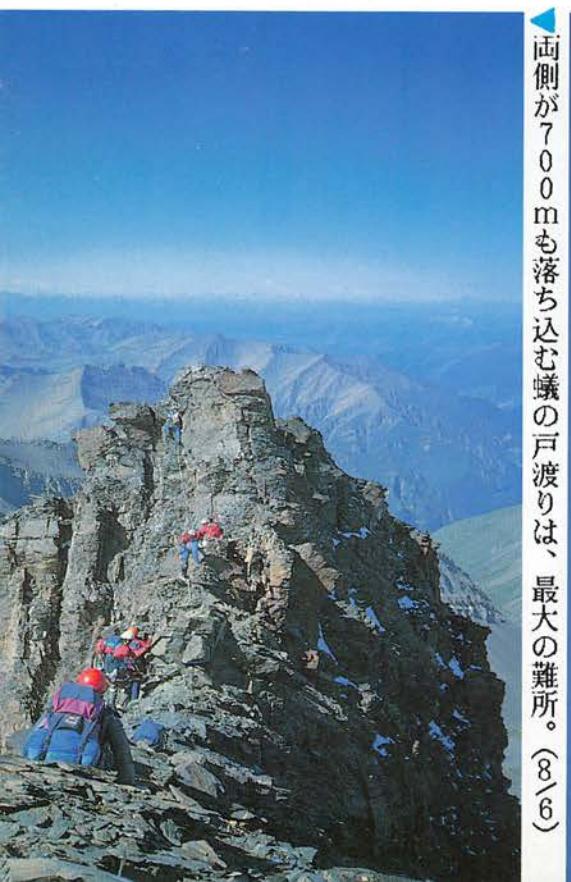
▲ 1次隊4名、全員登頂。(8/5)



▲ 2次隊、日中合計9名、全員登頂。(8/6)

◀ 登山靴が足に合わず、あきらめかけた張も、頂上に立つ。(8/6)

▼ 雪煙の舞う頂上を後にする。(8/6)



両側が700mも落ち込む蟻の戸渡りは、最大の難所。(8/6)



(8/1)



(8/3)





- ▲松潘県の少数民族の青年達が、登頂祝賀会を催してくれる。(8/14)
- ◀松潘県体育委員会に記念のペナントが贈られる。(8/13)
- ▼成都では『登頂勝利』の横断幕と小学生の花束が待っていた。(8/17)



- ▲CMA王鳳桐より登頂証明書の授与。(8/19)
- ▲CMA登山訓練基地での歓迎野外パーティ。(8/20)

I 計画概要

▼羌族の娘さん。



《趣旨》

日本ヒマラヤ協会（H A J）は、1967年創立以来ヒマラヤ諸国との友好親善・相互理解をモットーに登山・踏査・学術その他幅広い分野にわたって各種の文化活動を開してまいりました。

さて、この度、こつこつと積み重ねてきましたH A Jの登山実績と国際交流・渉外活動が実を結び、中華人民共和国四川省登山協会との合同により、日中四川雪宝頂合同登山隊を派遣することとなりました。

雪宝頂（5,588M）は、中国・四川省の北甘肅省との境を成す岷山山脈の最高峰であり、未踏の靈山であります。そして、その山容は文字通り天をさす白い三角錐の美しい山であります。

また、岷山は、“パンダの故郷”であり、付近には中国第一級の自然保護区である九寨溝があります。

H A J の日・中合同隊としては、1985年の日中女子合同隊に次ぐ2回目の合同隊であり、四川省が全面的にバックアップする体制になっております。云うまでもなく、合同登山は高所登山の経験はもとより、全般に渡る豊かな経験と明朗な人柄なくして成功することはできません。今回の合同登山におきましては、登山の成功は勿論ですが、より安全登山に心がけ、微力ではあります但し登山を通じて日中両国人民の友好親善に尽くす所存であります。

何卒、登山の趣旨をご理解いただきまして、ご協力下さいますようお願い申し上げる次第であります。

1986年4月

日中四川雪宝頂合同登山隊

隊長 遠藤 登

《計画の概要》

[隊の名称]

日中四川雪宝頂合同登山隊

CHINA-JAPAN JOINT MT.XUEBAO DING
(SICHUAN) EXP.1986

[目標の山]

中国四川省阿坝藏族自治州松潘県
雪宝頂（5,588M）未踏峰

[登山期間]

1986年7月25日～8月21日（28日間）

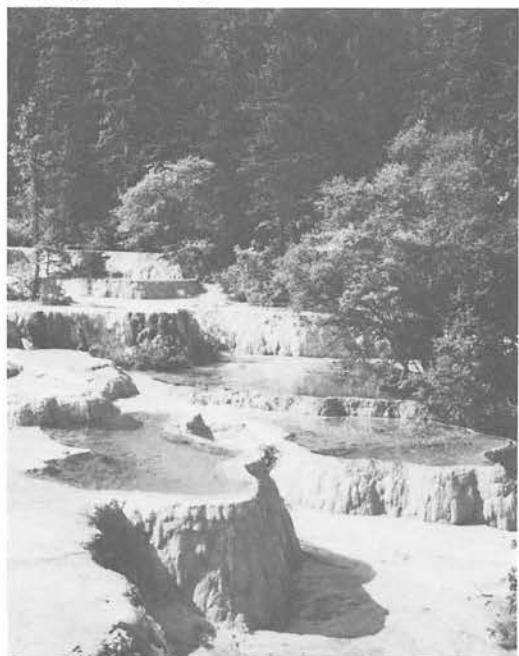
[目的]

- ① 日中合同による雪宝頂の初登頂
- ② 日中登山交流

[主催]

日本ヒマラヤ協会 四川省登山協会

▼黄龍寺の奇觀。



[隊の構成]

名譽総隊長 四川省人民政府副省長 康 振 黃
隊 長 日本ヒマラヤ協会副会長 遠 藤 登 (55才)
副 隊 長 四川省登山協会副主席 鄭 荣 発 (55才)
登攀 隊長 日本ヒマラヤ協会常務理事 八木原 圜明 (39才)
登攀副隊長 中国登山協会行政部部長 張 江 援 (33才)
日本 隊員 中 岡 久 (36才)
" 森山 公美丈 (44才)
" 福 山 信 (42才)
" 天 城 敏 彦 (38才)
" 菅 野 千 尋 (37才)
" 菅 原 和 明 (30才)
" 三 好 喜 代 美 (29才)
" 大 金 信 夫 (26才)
中国 隊員 楊 久 輝 (32才)
" 王 馬 特 (29才)
" 王 華 山 (29才)
" 李 慶 (26才)
通 訳 羅 凡 (26才)

[推進組織]

日本ヒマラヤ協会雪宝頂合同登山隊実行委員会
会 長 柴田 金之助
副 会 長 遠 藤 登
実行委員長 稲田 定重
事務 局長 山 森 欣 一
実行 委員 尾形 好 雄
" 飛 田 和 夫
" 登 山 隊 員

[事 務 局]

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号

[現地連絡先]

中華人民共和国四川省成都体育場路1号
四川省登山協会 TEL.2927

[留守本部]

事務局に同じ

▼登頂記念のサインをする遠藤隊長。(8/6)



▼サインをしたH A J の旗を持つ鄭副隊長。

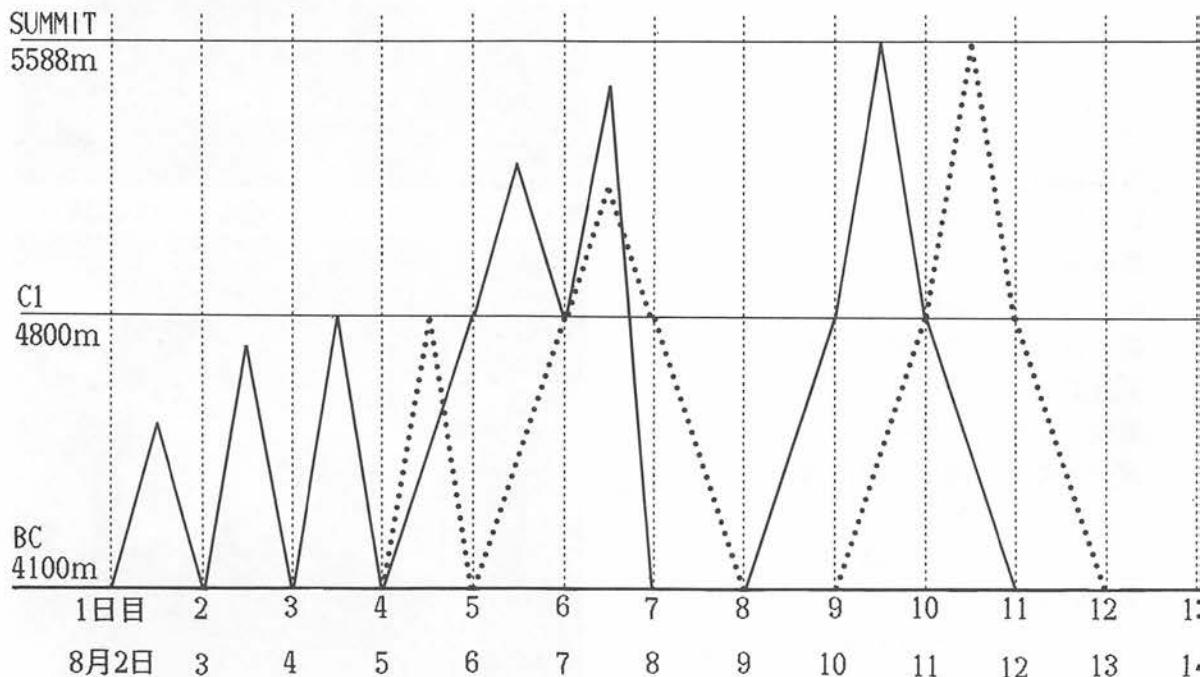


《日程概要》

[日 程]

7月25日 成田→北京 (JAL 781)
 26日 北京→成都 (飛行機)
 27日 成都
 28日 成都
 29日 成都→松潘
 30日 松潘
 31日 松潘→キャラバン
 8月 1日 キャラバン→BC
 2日 ↓ 登山開始
 5日 C1建設
 登 7日 C2建設
 山 11日 一次アタック
 期 12日 二次アタック
 間 13日 予備日
 14日 ↑ 14日 予備日
 15日 BC→キャラバン

[行 動]



16日 キャラバン→松潘

17日 松潘→成都

18日 成都

19日 成都→北京

20日 北京

21日 北京→成田

[登山活動]

- ・4人編成パーティを4パーティを作る。
- ・1パーティでルート工作、2パーティで荷上げを行う。
- ・各パーティにリーダーを置き、登攀隊長の指揮に従う。
- ・登山活動を前期、後期に分ける。
- ・アタックの前にBCにて休養をとる。
- ・アタック編成は2パーティとする。最大8名と7名。編成の発表は隊長による。

《食糧計画》

高所食のみ日本側の分担、BCは中国側の分担。

[基本献立] C1 64人日 C2 32人日

	品目	材料	数量
朝	①そば 48食	インスタントそば もち ネギ (F. D) 油揚げ (F. D)	48個 96個 3袋 3袋
	②お茶漬け 24食	α米 お茶漬けの素 おしんこ (F. D)	24袋 24袋 4袋
	③雑炊 32食	雑炊セット もち	32個 64個
昼	①ビスケット 中心 80食	ビスケット ゼリー サラミソーセージ あめ レーズン チョコレート	3.6kg 8袋 22本 20袋 800g 32枚
	②かりんとう 中心 24食	かりんとう チーズ ようかん あめ	3.2kg 24個 24個 20袋
夜	①カレーライス 32食	α米 レトルトカレー スープの素	32袋 32袋 32袋
	②おこわ定食 32食	おこわ 缶詰 ホウレン草 (F. D) マー婆一春雨 インスタント味噌汁	32袋 16個 16袋 8袋 32袋
	③牛どん 16食	α米 牛どんの素 おしんこ (F. D) インスタント味噌汁	16袋 16袋 4袋 16袋
	④納豆定食 24食	α米 納豆 (F. D) きんぴら (F. D) 缶詰 おしんこ (F. D) インスタント味噌汁	24袋 24袋 6袋 6個 6袋 24袋

[BCスペシャルボックス]

素麺	4kg
もち	100個
やきそば	40個
梅干し	3袋
切りぼし大根	1袋
するめ	15米
わかめ	15袋
鰯節	30袋
チーズ	32個
ゼリー	8袋
豆腐	4袋

[高所スペシャルボックス]

やきそば	20個
ラーメン	30個
もち	100個
のり	6袋
梅干し	2袋
缶詰	30個
日本茶	200g
コーヒー	50本
紅茶	50袋
砂糖	1kg
塩	100g
醤油	1瓶
乳製品	

▼BCでは、毎日、中華料理だった。



《 装備計画 》

高所キャンプ及び登攀用具は日本側の分担、BC用品は全て中国側の分担。

	品 目	数量	単重	総重		品 目	数量	単重	総重
幕 営 用 具	Iスリース(4~5人)	6	3kg	18kg	中 国 隊 員 支 給 装 備	登山靴	6	2.5	15
	テントマット	12				ピッケル	6	0.8	4.8
	タープ(2~3人)	2	0.8	1.6		アイゼン	6	0.8	4.8
	スコップ	4	1	4		ヘルメット	6	0.8	4.8
	細びき(3ミリ)	30M				ゼルブスト	6	0.4	2.4
	ろうそく(中)	4	0.03	0.12		アタックザック	6	1	6
	たわし	4	0.08	0.32		ヤッケ	6	0.9	5.4
炊 事 用 具	EPI ヘッド	6	0.4	2.4	中 国 隊 員 支 給 装 備	オーバーズボン	6	0.9	5.4
	ポンベ	60	0.4	24		帽子	6	0.25	1.5
	ランプ	2	0.2	0.4		高所帽	6	0.25	1.5
	コップフェル 大	4	1.2	4.8		サングラス	6	0.08	0.48
	ポリバケツ	4	0.1	0.4		手袋	12	0.1	1.2
	フライパン	2	0.3	0.6		カバーハンド	6	0.1	0.6
	テルモス	5	0.2	1		ソックス	6	0.2	1.2
	どんぶり	16	0.02	0.32		靴下	12	0.1	1.2
	さら	16	0.01	0.16		ヘッドランプ	6	0.2	1.2
	コップ・フォーク・スプーン	各16	0.05	0.8		毛下着上下	6	0.4	2.4
	マッチ	20		0.02		セーター	6	0.8	4.8
	ホエーブス	5	1	5		カッターシャツ	6	0.5	3
	メタ	5		0.3		水筒	6	0.3	1.8
	割箸	100		0.5		その他			
	包丁・しゃもじ	各 2		0.5	そ の 他	O2パック 15分	30	0.5	15
	タッパウェア	5	0.1	0.5		トランシーバー	4	1	4
登 攀 用 具	メイクサイル 9mm40M	4	2.5	10		工具セット	1		2
	フィックス 8mm 50M	32	1.6	51.2		トレベ	50	0.05	2.5
	スノーハー 60cm	40	0.2	8		事務用品			3
	ショーリング 6mm200M			2		撮影機材			12
	アイスハンマー ハイル	4	0.8	3.2		ハイビーム	2	1	2
	ハーケン	20	0.05	1		ガムテープ	20	0.2	4
	カラビナ	30	0.05	1.5		プラバール	30	0.5	15
	ユマール	16	0.2	3.2		冬山装備一式			15
	竹・布			2	個 人	生活用品			2

《 医療計画 》

[方針]

- ・自己管理を基本にし、健康維持、防災に努める。
- ・ドクターがいないので、お互いが健康を確認し合う。

[予想される症状]

- ・食事や水、更に疲労による胃腸衰弱、腹痛、下痢、食欲不振。
- ・高所障害による頭痛、むくみ、発熱。
- ・行動中の外傷、骨折、靴ずれ。

[健康チェック表]

(無→× 有→○ 激→◎)

月日	天気	起床時刻	脈拍数	呼吸数	体温	睡眠時間	頭痛	倦怠感	吐き気	息苦しさ	食欲不振	下痢	便秘	腹痛	目まい	むくみ	荷上重量	移動高度
(例) 8.2	雪	7:10	70	15	36.5	8	X	X	X	X	◎	X	○	X	X	18kg	800m	

[医薬品リスト]

薬品	商品名	BC	C1	計	薬品	商品名	BC	C1	計
ビタミン剤	アリナミン	2	2	4	外用薬	オイラックス	2	2	4
胃腸薬	三共胃腸薬	3	2	5		マーキュロン	2	2	4
	正露丸	2	2	4		テラマイシン	1	2	3
(下痢止め)	ペクリンネオ	2	2	4	その他	綿棒	1	1	2
利尿剤	ラシックス	2	2	4		応急ばん	5	4	9
	ダイヤモックス	2	2	4		弾力包帯	10	4	14
風邪薬	ルルエース	3	2	5		テピングテープ	5	5	10
精神安定剤	バランス	1	2	3		湿布薬	3	2	5
鎮痛解熱剤	エキセドリン	2	2	4		体温計	5	2	7
	セデスA	1	2	3		血圧計	1		1
抗痙攣剤	ブスコパン	1	2	3		爪切り	1	1	2
酸素	O2キャントル	5	25	30		はさみ	1	1	2
	O2発生器	1	2	3		ピンセット	2	1	3

《準備日誌》

発行：中岡 久

雪宝頂登山隊隊員の意思疎通を図り、また活動の記録を残すためにも定期的に通信を行いたいと思います。連絡事項等ありましたら、H.A.J事務局・各隊員にお知らせ下さい。

【雪宝頂通信NO. 1】3/15

☆3月10日集会報告

(1) 3月連休合宿について

3/21～23 八ヶ岳

(2) 各担当の準備について

3/20の集会に資料を準備してくる。

4/14の集会にリストを検討する。

(3) 中国語テキストとテープが配布

(4) 次回集会日程

3月20日(木)

4月14日(金)

【雪宝頂通信NO. 2】4/21

☆4月14日集会報告

(1) 5月合宿について

5/3～5 富士山

(2) パスポート用の写真を至急提出

(3) 追加隊員

三好 喜代美 29才 女性

(4) 今後の日程

6/7～8 隊荷梱包

スノーバー作成

6月中旬 装備発送

7月12日 家族会・壮行会

(5) 次回集会日程

4月25日(金)

5月12日(月)

【雪宝頂通信NO. 3】5/31

☆4月25日集会報告

(1) 富士山合宿打ち合せ

(2) 医薬品の検討

(3) 健康チェックカードの作成

☆5月12日集会報告

(1) 富士山合宿報告

(2) 食糧、装備の検討

☆5月19日集会報告

(1) 食糧計画の検討

(2) 装備計画の検討

☆5月26日集会報告

(1) 梱包作業の打ち合せ

(2) 食糧・装備計画の打ち合せ

(3) 個人装備について

(4) ワッペン・ステッカーの作製

(5) 報告書・歌集について

【雪宝頂通信NO. 4】6/15

☆6月7日～8日梱包作業報告

☆7月13日に最終打ち合せを行う

☆次回打ち合せ 6月23日

【雪宝頂通信NO. 5】7/1

☆6月23日集会報告

(1) 松館隊員不参加 6月中旬アキレス腱を切る怪我をしたため参加を断念。

(2) タクテクスを検討

(3) 遠藤隊長よりシールが配布

(4) 次回集会7月7日

II 行動記録

▼マニ車を回すチベット族の老人。



《 アプローチ 》

森山 公美丈

7月25日 【成田→北京→成都】

朝6時、H A J事務所より隊荷を持って出発。宮崎久夫会員のトラックで箱崎まで送ってもらう。箱崎で、角田さん（故角田不二会員のお母さん）宅に泊まった三好と合流。山森、宮崎、角田、三氏の見送りを受け成田へ。10時12分、J A L 781便は一路北京へと飛び立つ。

13時48分、北京空港着。通関の際、プラパールの中を見せろと言われる。『誰の申告書にもこの様な大きな荷物は記載されていない』というのが理由。日中合同登山隊であることを説明して納得させ事無きを得た。中国登山協会の許競先生、汪鉄銘先生らの出迎えを受ける。

成都行きの国内便出発まで5時間ほど、空港2階のロビーで待機。その間、食事をしたり懇談をしたりして時間をつぶす。19時23分、民航機で成都へ向かう。22時3分、成都空港着。今回の登山隊副隊長である四川省登山協会副主席鄭榮發先生、馮有榮女史らなつかしい方々の出迎えを受ける。四川電視台のスポットライトを浴び、四川省を挙げての行事であることを改めて感じる。空港よりマイクロバスで錦江賓館にやっと入る。成都は蒸し暑い。

7月26日 【成都】

四川省体育委員会にて、午後2時過ぎまで隊荷の再梱包作業。18時、錦江賓館會議室で、四川省人民政府副省長であり登山隊名誉総隊長を務める康振黃先生をはじめとする中国側の要人と会見。その後、歓迎宴会となる。カンペイ、カンペイの連続。

7月27日 【成都→紅原】

早朝6時、四川省体育委員会の食堂にて朝食。経度の関係でまだ星空。7時前、バスとトラックで出発。10時半、汶川着。20分休憩後、紅原を目指す。6月の洪水で道路が決壊し、松潘へは大廻りとなる。11時55分、理県を過ぎた辺りで初めて雪山が見える。成都は夏であったが、渓谷の斜面に作られた畑は、菜の花の咲く春真っ盛りであった。松潘草地の大草原地帯は、なだらかな丘陵が延々と続き、そこかしこでチベット族が、ヤクや羊の放牧をしている。

18時30分、走行距離430KM 所要時間12時間のすえ、海拔3400M の紅原招待所に着く。さすがに、外気は肌寒い。

7月28日 【紅原→松潘】

午前9時に出発。昨日と同じ様な高原地帯を松潘に向けて走る。いささか高原の景色にも見飽きた頃、車は一気に、川沿いの道路まで高度を下げる。麦畑や点在する集落の中を14時30分、松潘県人民政府招待所に到着。隊荷を積んだトラックも着き、個装を降ろす。人々が集まってきて見物する。外国人には未開放の土地故珍しいのだろう。

B Cへの道が決壊しているとの情報があり、明日、先遣隊として中国側4名、日本側2名を出すことになった。（張、楊、王華山、王馬特、森山、大金）

夜は、招待所内の食堂で松潘県要人及び体育委員会のメンバーが歓迎の宴を催してくれる。

野良仕事に出かける岷江の子供。



7月29日

(先遣隊) 【松潘→大沟】

午後2時出発。途中、岷江で休憩。ここからは車1台がやっとの荒れた道。5時過ぎに大沟着、テントを張る。上高地のスケールを大きくした様な所で、なかなか快適である。天候は下り気味で、ここから見えるという雪宝頂は雲で見えない。馬に運ばれた隊荷も着く。

(本隊) 【松潘】

午前中、松潘体育委員会の体育館で隊荷の整理。午後は自由行動。

7月30日

(先遣隊) 【大沟→BC】

午前10時半、いよいよBC予定地に向け出発。午後1時半頃、BC地点(4170M)に着く。隊荷も到着したので、中国隊員と共にBCの設営にかかる。平らな草原状の台地でなかなか良い所だ。BCもほ

ぼ完成し、ようやく雨も上がり、雪宝頂も姿をあらわしてきたので、軽く偵察をする。

(本隊) 【松潘→大沟→BC】

午前9時、マイクロバスで出発。9時40分、岷江着。ここから先は、ランドクルーザーでないと行けないので、隊員を分ける。先発は直ちに出発。後発隊のためにトラクター(耕うん機にリヤカーの付いた代物)が出ることになる。途中、大姓で昼食をとる。再び、尾てい骨割りのトラクターで向かう。先発のランドクルーザーが戻ってくるのに出会い、これに移乗し、更に進む。14時30分、大沟着。雨具に着替えBCに向かう。森林帯の中のよく踏まれた道を、緩やかに高度を上げていく。森林限界を出たところの古い荒れ寺の先を左に道をとる。高山植物の咲き乱れる急な坂道を登る途中で、先発隊に追い着く。小さな丘状帯を越えると、突然雪宝頂が眼前に現れ、18時過ぎ、BCに着く。

7月31日 【4300Mまで偵察】

夜明け直後の午前9時、BC開村式を行う。成都電視台の単がビデオを盛んに回す。全員緊張の面もち。

10時、八木原登攀隊長、張登攀副隊長、王馬特、大金の4名でルート偵察に出る。残ったメンバーは、食料、装備の整理と、荷上げの準備を行う。また、中国隊員への個人装備の支給も行う。

14時過ぎ、偵察隊が帰ってくる。約4300Mまで登ったが、ルートは見た目より簡単そうだとの事。『ガレ場を登り、雪渓右側のルンゼをつめ、一気に稜線に出て、そこから岩稜帯を進み、雪稜に出る。1週間あれば充分。けがや高度障害さえ出なければ全員登頂できるだろう』というのが登攀隊長の意見である。八木原を信頼しきっている日本側は、みんな気を良くする。しかし、中国側は、不安げな様子。

14時30分、偵察に行かなかったメンバーは、高度順化のため、対岸の山に登る。高山植物が咲き、夏山の気分。中腹の台地には、雪融け水をたたえた小さな氷河湖がある。この合同登山のために何度も偵察に来た季によれば、魚もいるそうだ。約4300Mまで登り、16時半ごろBCに戻る。

夕食後、打ち合せを行い、タクテクスが決定。

- ・C1は、5000M前後の、岩稜を越えた雪稜下部のコルに設営
- ・8月1日、2日の両日、ルート工作と荷上げ
- ・8月3日、C1建設。その後、2回または3回に分けてアタック
- ・明日の出発は7時30分

8月1日 (6:20 -1°C)

【BC→4900M 稜線】

隊長、副隊長を除く全メンバーで、ルート工作・荷上げに出発。昨日の夏山気分はどこへやら、テント回りの水滴は凍り、気持ちも引き締まる。

河原を徐々につめ、台地を越えるとグズグズのガレ場になる。左にトラバースぎみに登ると小さなプラトーに出る。格好の休憩地点。ここからはガレ場をほぼ直登する。落石が起り出す。先行者の足元から浮き石が落ちる程度なので、注意さえしていれば当たることもない。垂直の岩場の下から左へトラバース。岩場の上から自然落石がくる。斜度がかなり有り、フィックス1本50Mを張る。ヘルメットを締め直す。岩場の下をぬけるとルンゼ状の直下に出る。ここから稜線までは、ガレ場の直登だ。一步登るたびに石が落ちる。フィックスを3P150M設置。先頭集団が行動中は、後続組は岩陰に避難、後続組が行動を開始すると、先頭集団は行動停止、これの繰り返しから、距離の割には時間がかかる。誰かのどこかには、一度は石が当たる始末、人数が多いからよけいである。

13時30分、全員稜線に出る。高度計は、4900Mを示す。中岡が、岩稜帯を30分ほど進み、ルートを調べる。悪くはないが、やはり岩がもろい。転落には充分気をつけなくてはいけないだろう。ハーケンもあまり効きそうにない。今日はここまでとし、荷物をデポして下る。

下りの落石は、登りに比べられないほど多い。ルンゼ状の下部を登ってくる遠藤隊長が見える。『落石があるから下りてくだ

さい』と、大声で叫ぶが、声が届かない。しばらく下ると、白いものが、舞い上がっている。羽毛だ！岩陰に隊長がうずくまっている。一瞬、『隊長が……』の思いがよぎる。声をかけてみる。元気な声が返ってきた。落石が尻に当たり、羽毛ズボンが大きく裂けていた。隊長も、なんとか稜線までと思っていたらしいが、隊員と一緒に引き返す。

16時40分、BCに戻る。戻ったら雨になる。放牧にここまで上がってきたチベット族の人たちが、登山隊の成功と安全を祈って、雨の中、勇壮な踊りを披露してくれる。隊長はじめ隊員も、見よう見まねで、踊りの輪に加わる。

8月2日 (6:00 1°C)

【荷上げ】

午前8時、昨日と同じルートで荷上げに出る。メンバーも、同じだが、中国側は、松潘体育委員会のBC管理員2名を同行。体調の芳しくない者の荷を担いでもらう。日本側も、菅野の調子がいまいち。岩場のトラバース地点にさしかかった所で、八木原登攀隊長より荷上げ品のデポと下山の指示がある。中岡、菅原、大金の3名は、稜線直下までフィックスを張るために登高。他は全員下山、12時30分BCに帰る。15時過ぎ、中岡ら3名も、3P150Mのザイルを固定して戻ってくる。昼過ぎから降り出していた雨が、このころより雪に替わる。菅野、顔がむくみ、まんまるくなってきた。

8月3日 (6:30 -2°C)

【休養】

昨日来の断続的な雪は、今朝になって、

辺りを銀世界にしていた。みんな、のんびりと思い思いに過ごす。菅野、テントの中にいること多く、やはり調子悪いらしい。

午後5時より、遠藤、八木原、中岡の3名と中国側の打ち合せ。

【日本側の提案】

- ① 4日 岩稜帯を越え雪稜とのコルにC1を設営、第一次アタック隊が入る。他のメンバーは、C1まで荷上げ後BCまで戻る。
- ② 5日 第一次アタック隊は、ルート工作をしながらできればアタック、できなければ翌6日にアタック。他のメンバーは、C1までの荷上げと第一次アタックが成功した場合は、C1に入り、アタックが無かった場合、BCへ戻る。
- ③ そのために、中国側から2名、第一次アタック隊に入って欲しい。

【中国側の意見】

- ① 稜線までのルートが危険である。雪が降った後なのでなおさらだ。
- ② 岩稜帯から雪稜へ下るところの様子がよくわからない。多分切れているのではないか。
- ③ そのため、西稜側のルートを偵察してみたい。

第一次隊には中国隊員もぜひ入って欲しい、雪宝頂は、中国の未踏峰であるから。『西稜も、南稜と同じで岩稜帯が続き、南稜よりもはるかに長いルートである。南稜の岩稜帯から雪稜への下りも、フィックスロープを張れば、それほど問題はない』八木原登攀隊長が、今までの経験を基に説得

をするが、同意は得られなかった。

最終的に、第一次アタック隊は、日本人だけで良いのかを確認し、明日は別々に行動することになった。これらの事を日本側隊員に発表するとともに、菅野の明日の行動も中止を決め、本人に伝える。

8月4日 (6:30 0°C)

【C1建設】

遠藤隊長、菅野を除く日本側8名は、8時C1設営のため出発。予定通り12時ごろには稜線に抜ける。ここまでガレ場も、2日間の行動で踏跡もかなりしっかりしてきた。

しかし、岩稜帯はもろい岩と浮き石だらけ。フィックスを張るにもハーケンは効かず、岩に直接かけたりしながら進む。結局3P150M 工作する。

14時50分、5100M のC1地点着。第一次隊（八木原、中岡、菅原、大金）はC1設営、第二次隊（森山、福山、天城、三好）は、一次隊の成功を祈りながらBCへ戻る。

西稜の偵察を行った中国隊は、確実なルートも見つからず、稜線に出ただけでBCに戻る。

8月5日 【第一次アタック成功】

朝6時、昨日C1に入った第一次アタック隊の八木原登攀隊長から定時交信。C1の4名は全員元気、朝食が済み次第頂上に向かうとの事。BCからは岩稜の陰になってC1は見えない。

6時45分、第一次アタック隊が出発するとの無線。このころになると、鄭副隊長をはじめ中国人メンバーも全員テントの外に出てくる。外はまだ暗い。

小さな光が、雪稜に現れた。少しずつ上へ上へと動く。明るくなるにつれ、小さな光は黒い点に変わる。遠藤隊長と鄭副隊長が替わる替わる双眼鏡をのぞく。4つの点の間隔がバラバラになってきた。傾斜が急になってきたのだろう。

8時過ぎ、先頭の点が、頂上直下で突然動きを止める。2分、3分、……まだ動かない。『どうしたんだ?』双眼鏡でもよく判らない。みんなも不安になってきた。

2番目、3番目の点が上がってきて1つになる。動き出した。『待っていたんだよ。上がってくるのを』隊長の声に、一同ホッとする同時に感心する。

8時13分、4つ目の点も頂上に着く。『登頂に成功しました。全員無事です』八木原登攀隊長からの無線が入る。遠藤隊長と鄭副隊長が喜びの握手を交わす。BCの全員が歓声をあげ、誰彼と無く握手を交わす。今朝だけは、コックさんも朝食そっちのけだ。

第一次アタック隊4名は、30分ほど頂上に留まり、下山開始。頂上からフィックス200M、C1帰着後、中岡、大金で登り直し、150Mを追加。

第一次隊の成功を確認した第二次隊の9名（張登攀副隊長、楊、王馬特、王華山、李、森山、福山、天城、三好）は、9時C1へ向かう。14時、下山の一次隊と稜線デボ地点で交差。中岡は二次隊サポートのため再びC1に戻る。15時40分、第二次隊C1に入る。

中岡を除く一次隊は、18時20分BCに戻り、大歓迎を受ける。

8月6日 【第二次アタック成功】

7時20分、第二次アタック隊出発。一次隊の張ってくれたフィックスがあるので安全に高度を稼ぐ。1Pに9名が連なるのは、幾らなんでも多過ぎる。李のペースが遅いので、ちょうど良い具合にグループができる。

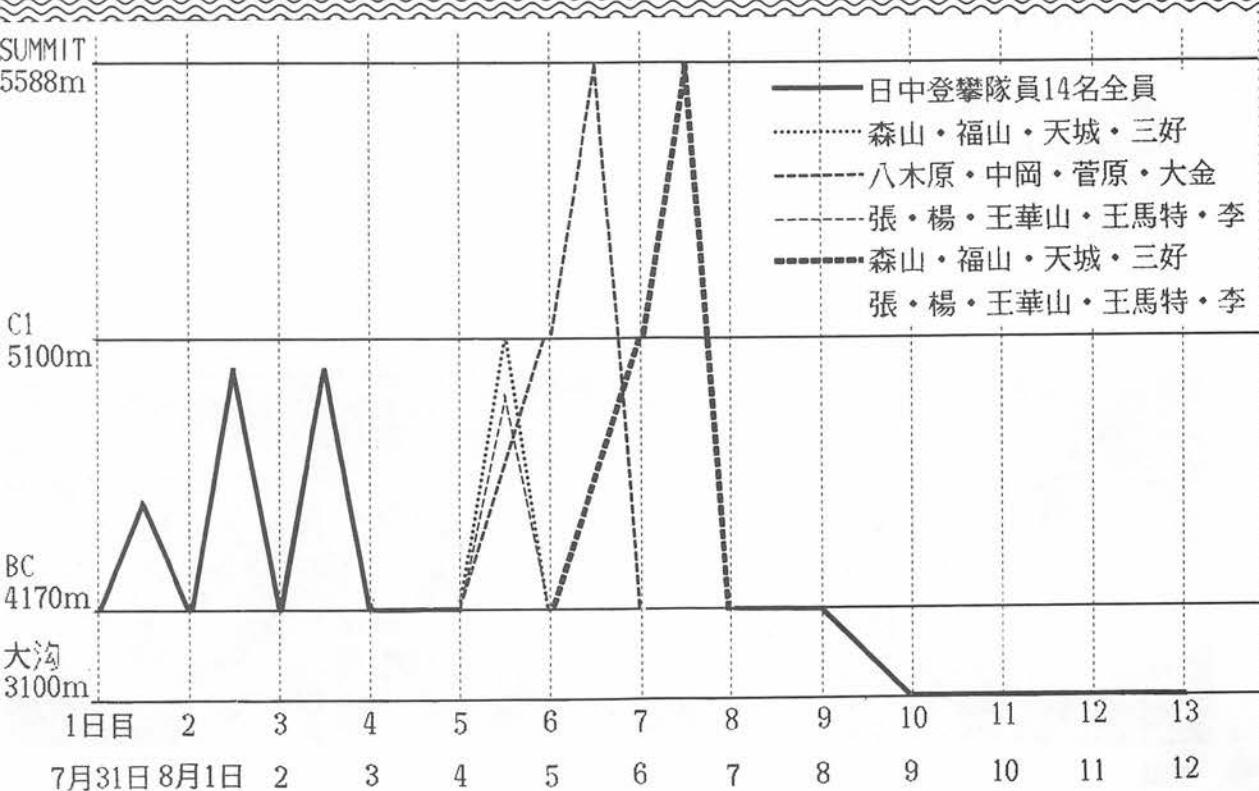
8時45分、9名全員登頂。BCへ報告をいれる。菅野がここにこれなかったのが唯一の心残りである。記念撮影をした後、下山にかかる。

10時40分、C1を撤収してBCへ下る。岩稜帯の蟻の戸渡りでは、2~30kgの荷物のため、またいで渡る者もでる。落

石と転落に気を付けながら下ると、トラバース地点に菅野が上がってきていた。また、プラトーのケルンでも隊長の出迎えを受ける。

16時15分、9名そろってBCに帰着。中国人スタッフの爆竹と花束による熱烈な歓迎に驚く。

夜は、雪宝頂登頂成功を祝して大宴会となる。錢、李両コックが腕をふるってくれたご馳走が山盛り。日本人のためにあっさりした調理の心遣いが嬉しい。『你們的拿手菜太好吃』（貴方がたの得意料理はとても美味しい）



7月30日にBC入りしてから5日目、アタック態勢に入った。8月4日、日本隊員8名により、C1までのルート工作と荷上げを行い、そのまま八木原登攀隊長、中岡、菅原、大金の4名がC1に残り、アタックに備えた。C1まではガレた落石帯と岩稜で、ここから線を画した様に雪稜が頂上へと延びている。夕食は久々の日本食。油と臭いの強い中華料理に辟易していたところなので、食欲もわいた。『いよいよ明日は……』と思いながら、下痢腹をかかえ外に出ると、岷山の峰々が、オレンジ色の夕日に染まっていた。

8月5日、5時30分起床。外はまだ星が輝いている。おなじみの『玄さん』を書き込んで、出発準備を始める。1人当たり50Mの固定ロープとスノーバー1本をザックに入れ、6時45分BCと交信後C1を出発。日の出を前にまだ暗く、ヘッドライトをつけながら慎重に歩を進める。クラストした雪なので、アイゼンがよく効く。徐々に傾斜が増し、そのうち空も白み始める。各自、思い思いのベースで登る。固定ロープを張っていないので、ただスリップだけ

はしないようにと注意を払った。初めて獲得する5000Mの稜線を、写真を撮ったり振り返したりする以外は、ただ単調な登りを息苦しさの中で繰り返すだけだった。下から仰いでピークに見えたところは、傾斜を緩め更に奥へと続いていた。

突然、太陽の眩しい光が目に入ってきた。3本の雪庇の張り出した尾根を集めて、頂上がそこにあった。初日の出を拝むかのように、思わず手を合わせたくなった。写真を撮っているうち、中岡、菅原が到着、中岡が未踏の頂上を踏んだ。間もなく八木原も到着し、お互いに握手を交わす。八木原がBCと交信をする。『8時13分、4名全員登頂』替わる替わる、喜びと感謝をBCへ伝えた。中国、日本、H.A.Jの旗をピッケルに結わえ、型どおりの儀式を行う。

帰りは、頂上から200Mの固定ロープを張りながら下降。C1に着き、八木原、菅原は二次隊用のテントをもう一張り設営。この間、中岡、大金は、更に150Mの固定ロープを追加するため、フィックス終了点まで二度めのアタック(?)。そして、登山活動最良の日は終った。



▲頂上手前でトップをゆずった大金。(8/5)



▲夜遅くまで歌に興じた大沢のキャンプ。(8/1)



登頂成功後C1に戻り、アイゼンを外していた時だった。三好の『福山さんは、ハッタリで登ったのね』の声に思わずドキッとする。

確かに、今回は何としてもピークに立ちたかった。松潘からBCまでの登りで、後発隊のトップでかけあがったのも、また、8月1日の荷上げ初日に落石を右足くるぶしに受け、かなり痛いのを隊長や登攀隊長に隠したのも、アタックから外されるのを避けたいためだった。高度に対する不安はなかったので、自分のペースさえ守れば登れると思っていた。

幾度も目がさめ熟睡できなかつたのは、テントが狭かったせいだけではない。初めてのピークをすぐそこにして、やはり興奮していたのだろう。

6時、みんな起き出して朝食の準備を始める。星空だ。風もない。中国隊員も既に出発の準備を始めている。成都を出るときから風をひき、昨日C1に上がるときも、嘔吐を繰り返していた李の調子が気になる。本人は大丈夫だと言う。何としても登るという決意に満ちた態度で、アイゼンを着け始めていた。どうせ、体力のない自分だ、李と一緒にゆっくり登ろう。

一次アタックに成功しながらBCへ下ることなく、二次隊サポートのためC1に残ってくれた中岡に見送られ、9名は7時20分、C1を出た。上りにかかったところで左手下方に目をやる。BCのテントがよく判る。隊長、副隊長、登攀隊長達が、我々の事を気遣い、黒い点を数えていることだろう。フィックスが現れた。やはりホッ

とする。

先頭を登る者が、気付かぬうちに斜登するのだろう、ザイルが左へ流れる。大声で注意をする。支給の登山靴が足に合わず、軽登山靴にオーバーシューズ、それにアイゼンをつけた張の足元は、大丈夫だろうか。立ち止まって上に目をやると、調子良さそうにビデオを撮っている。

傾斜が強くなるにつれ、やはり遅れだした。いかに経験のある高度とはいえ、酸素分圧は、平地の半分近いはずだ。とにかく足元だけを見て、一步一步登ればそのうち着くだろう。8月1日の荷上げのときに落石の当たった右足首が、やけに痛い。

カラビナをかけ替える数秒の停止を格好の休憩にしながら、黙々と登る。上から歓声が聞こえた。きっと頂上に着いたのだろう。自分がそこに行くまでは決して上は見まい。段々声が近づく。

まぶしいほどの光が当たつた。顔を上げると、森山がいた。天城、三好、張もいた。更に目を前方にやると、もう雪の斜面はなく、岷山の峻嶺が、遠く朝日に輝いていた。

8月6日、午前8時45分、二次アタック隊9名全員山頂に立つ。無線でBCに報告する。交代で、喜びと感謝の言葉をBCに伝えた。





▲アタック準備をする森山と楊。(8/5)

▼下りのガレ場。



▲頂上に立つ福山。(8/6)

◀団体行動をとる中国隊員。(8/6)



《登山を終えて》

菅原 和明

8月7日 【隊荷の整理】

朝食後、H A Jの旗に隊員全員で記念のサイン。鄭副隊長が、成都、北京へ登頂勝利を報告するため下っていった。

隊荷の整理と梱包をする。午後、必要な荷物を馬で大沢へ降ろす。中国側登攀隊員5名も大沢へ先行する。

夜、山羊の焼肉とキャンプファイヤー。日中の歌を交歓して遅くまで楽しむ。

8月8日 【BC撤収→大沢】

11時、BCを撤収して下る。快晴、絶好の下山日好り。色とりどりの高山植物が咲き乱れる道を、各自気ままに大沢まで下る。振り返り仰ぎ見る雪宝頂は、紺碧の空からその純白の頂で、我々を見送ってくれていた。

14時過ぎ、大沢着。昨日下山した中国隊員がキャンプを設営してくれていた。やけに立派にできている。12日まで4泊すると言うではないか。ナットク、しかし、ガックリ。八木原いわく『これでは、山流しだ』

8月9日 【大沢】

ここは中国、しかたがない。郷にいれば、郷にしたがえ。岷江の流れで体や髪を洗うもの、洗濯をする者、昼寝をむさぼる者、各自様々に過ごす。

天城が魚を釣ってきた。鱒のなかまだろう。隊長も釣ってきた。けっこう釣れる。福山は、『お仕事、お仕事』と言いながら、撮影に余念がない。

午後、鄭副隊長が松潘から戻ってくる。四川省や中国登山協会からの祝電を披露す

る。歯痛で頬の腫れた楊をつれて松潘へ戻る。

8月10日 【大沢】

あい変わらず天気はよい。のどかな避暑地ぐらし。夜、ファイヤーを囲み山羊の焼肉パーティ。通りがかったチベット族の娘さんが、飛び入りで哀調ある歌を聞かせてくれた。遅くなつて、大沢の責任者もお祝いにきてくれる。

8月11日 【大沢】

釣り、読書、トランプ、散策、昼寝……。今日1日だけである。

夜、昨夜来た大沢の責任者が再びやって来て、登頂のお祝いにと遠藤隊長に白いカタを贈ってくれる。外国人に贈るのは初めてとの事。

8月12日 【大沢→大姓→松潘】

山流しからやっと解放される日がやってきた。9時半迄に撤収を完了。迎えに来たランドクルーザーで大姓まで行く。ランドクルーザーは、全員を運ぶのに3回往復。大姓では、松潘県の副県長が出迎えてくれる。中国隊員は、2週間ぶりに見る新聞を奪い合う。やはり、世の中の動きが気になるらしい。

昼食後、マイクロバスで松潘に戻る。15時40分、松潘招待所着。

いつの山行でもそうだが、里に下りて入る風呂は格別だ。

8月13日 【松潘】

8時45分、招待所をマイクロで出発、

黄龍寺に向かう。雪宝頂北面を望みながら休憩。登頂の感激がよみがえる。

石灰分を含んだ流水の作る自然の景観に驚く。

夜、松潘県の祝賀会。カンペイ！ 福山の作詞した『四川之夏』（北国の春の替え歌）を日本隊員で歌う。みんな無事に下山できて嬉しいのだろう。

8月14日 【松潘】

日中は、街をぶらつき、買物をしたり見物をして楽しむ。

夕食後、招待所近くの人民政府文化局に於て、少数民族の青年男女による登頂祝賀演芸会が催される。チベット族、回族、羌族の色とりどりの民族衣装を身に着けた若者の歓迎に、『山流し』の恨み（？）も何処かへすっとんってしまった。

招待所に戻ってからも、中国人メンバーを交え、あちこちの部屋で賑やかな交歓会。

8月15日 【松潘→紅原】

天気は余り良くない。思い出多い松潘の人たちの見送りを受け、紅原に向かう。2週間前に通った道であるが、初秋の趣に変わっていた。2時40分、紅原招待所着。

8月16日 【紅原→汶川】

雨。1日で成都に戻れるはずだが、成都での歓迎会の日程で、今日は汶川まで。

汶川の街は、6月の大洪水で大きな被害を受けたという。招待所の1階は、浸水のため今も使えない。

8月17日 【汶川→成都】

いよいよ成都に戻る日だ。通訳の羅は、嬉しくて嬉しくて、浮き足立っている。

途中、天府の源である“都江堰”という灌漑施設を見学。さあ、一路錦江賓館へと思いつか、バスは水田のそばで停車。道端に座り込み、西瓜のおやつ。時間調整だ。3時丁度に錦江賓館に着かねばならないという。

バスが錦江賓館に着いた。『熱烈歓迎中日聯合雪宝頂登山隊登頂勝利』の横断幕が目に飛び込んできた。バスを下りた隊員一人一人に、可愛い小学生が花束を贈呈してくれる。ホテルの窓から身を乗り出すように見物していた宿泊客からも大きな拍手。

隊荷の整理を登山協会で行った後、賓館に戻る。風呂に入り、髭を剃り、身支度を整えた隊員は見違えるばかり。夜は、成都ホテルにて名誉総隊長の康振黃先生に報告の会見、引き続き大祝賀宴会。

8月18日 【成都】

9時20分から、登山協会に於て、TV、新聞、雑誌、ラジオの四川省内マスコミ各社の記者会見。午後から成都市内の見学だが、あいにくの大雨。

夜、日本側主催の答礼会。

8月19日 【成都→北京】

6時起床。連日の酒宴で寝不足ぎみ。6時50分、賓館出発。8時40分、四川の人たちに別れを告げ、民航機で北京に戻る。

夜は、又、中国登山協会の祝賀会。王鳳桐先生から、一人一人に登頂証明書が手渡され、感激を新たにする。

8月20日 【北京】

明の十三陵見学後、北京郊外にある登山協会訓練基地に招待される。茅台酒で乾杯。真っ昼間からである。昼食後、今春開放さ

れたばかりの慕谷嶺の万里の長城を見学。夜は、基地の職員とその家族による心尽しのパーティ。張登攀副隊長の尽力によるところが大きい。

8月21日 【北京→成田】

午前中は、故宮見学や買物。その後、H A J主催で答礼会。全員赤い顔で北京空港へ。14時、28日間に渡る日中友好の合同登山を終え、一路成田へ飛び立った。19時45分、友好親善の大きな成果を挙げて、全員無事日本に帰る。



▲大沢の責任者がテントを訪問。(8/11)



▲松潘の雨ごい祭。(8/14)

▼荷物は馬に、身軽な下山。(8/8)



▼松潘県祝賀会。成功の酒は格別だ。(8/13)



▼成都錦江賓館の玄関でテレビ撮影。(8/17)



III 隊員プロフィール

▼少数民族の青年達。



(寸評：三好 喜代美)



名譽総隊長 康 振黃
四川省人民政府副省長
人口1億人の省の副省長。
物静かな理論派タイプとお見受けする。



隊 長 遠藤 登
1971 マナスル副隊長

15年前のマナスル遠征に使用した風格のあるアイゼンとピッケルを持参。白いものも混じった髪はなかなかの貢献。登頂は隊運営上自ら断念。その意気は現役そのもの。



副隊長 鄭 荣發
四川省登山協会副主席。

温厚。そうだが口論好きらしい。出発の前日、娘さんが結婚されたとかで、バスの中で祝いのお菓子を配ってくれる。スケジュール調整に腐心。登山隊成功の影の功労者。



登攀隊長 八木原闇明 登頂
1985 エベレスト登頂
ヒマラヤ登山のベテラン。
いつでも人の和を作ってしまう。大胆かつ神經細やか。
遠くから見てもその体躯と歩き方ですぐ判る。登攀隊長としてルート工作に当たり、その実力を發揮。



登攀副隊長 張 江援 登頂
各国登山隊の連絡官を歴任した中国登山協会のエース。

185cm以上の長身。隊全体の事を常に考え、まじめで誠実な人柄。時には短気な面ものぞく。登山靴が足に合わず登頂を断念しようとした悲しそうな顔が印象的。



隊 員 中岡 久 登頂
1985 K2副隊長

常に最前線でルートを切り開く。登頂成功の影に彼の力有り。隊のマネージメントを一人でこなしたまじめ人間。遠征中、喫煙量がますます増え、まさに動く煙突。忌煙(チイエン)！



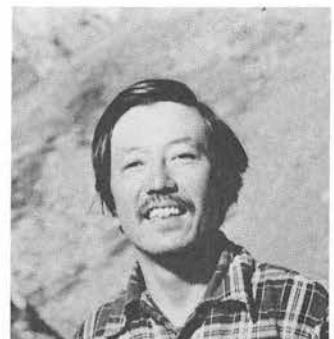
隊 員 森山公美丈 登頂
神戸市水道局勤務の公務員

お酒をこよなく愛する。四川の五糧液（名酒）がいたく気に入った様子。稜線で3M墜落しても涼しい顔は、年の功か。松潘で買った人民帽が良く似合う通称「松潘のオッチャン」



隊 員 福山 信 登頂
1983-84 チヨモランマ隊員

あやしげな中国語を話す。四川人の四川訛を直していく。小さい体に、大きなカメラをぶらさげ、お仕事熱心。雪宝頂はチヨモランマのトレーニングとうそぶく意気盛んな熟年。



隊 員 天城 敏彦 登頂
1983 ヌン隊員

お酒が好きで、B.C.でも毎晩晚酌。足も速く、終始マイペース。料理の味についてはちょっとうるさく、本場の味に挑戦するそうだ。魚釣りも達者、大沟での4日間を一番有効に使う。



隊 員 菅野 千尋
帰国後、英国留学

常にメモとボールペンを離さない記録魔。その詳細な記録は、報告書作成に大いに役立つ。高所順応が遅れ、山頂には立てなかつたが、カメラにはしっかり中国を記録。



隊 員 楊 久輝 登頂
中国登山協会連絡官

身長190cm、強面の風貌からは想像もできないほど、優しくておとなしい。歯痛で頬が腫れ上がった時は、いまにも泣きそう。武漢に妻と娘を残し、北京に単身赴任。



隊 員 菅原 和明 登頂
高等学校の教諭

身体は細いが、ルートを開き一次登頂を果たす。生まれたばかりの一人娘「エリコちゃん」と愛妻を日本に残して中国へ。自称「少数民族研究家」(但し、女性だけ)通称「オンブバッタ」



隊員 三好喜代美 登頂
小学校教諭

日本側隊員の紅一点。中國隊員にもてることこの上なし。独身が効いたのか。荷上げでも、男以上に担いだ女丈夫。口で争えば勝てる者なし。登山中、顔がまん丸くなりまるでお饅頭。



隊員 王馬特 登頂
四川省登山協会連絡官

なかなかの勉強家で、日本語を独学中とか、充分意思は通じる。足が長く、スタイル抜群とは三好の評。バスの中でも水をたくさん飲むなど、高所順応に努める用心深さはみごと。



隊員 王華山 登頂
四川省登山協会連絡官

英語が話せ、返事はいつも「Just, OK!」良くしゃべり、にぎやか。アイゼンをはくのは初めて。だが、岩場でのバランスはとても良い。美人の奥さんの出迎えを受け、満面笑み。



隊員 大金信夫 登頂
隊員中最年少26歳。同年の通訳 羅に「可愛い、私の生徒のよう」といわれ、悔しがることしきり。小柄だが、パワーがあり、頂上手前で後続を待つ余裕。87年6月めでたく結婚。これで当分海外登山ともオサラバか？



隊員 李慶 登頂
四川省登山協会連絡官

3月来日の際は通訳、今回は隊員。入山前から体調をこわし、吐きながら登頂。その気力は見上げたもの。日本の歌をたくさん知っている。通訳の羅とは幼なじみとか。



通訳 羅凡
四川の大学で日本語の教師

美人と、もっぱらの評判。気が強くて、明るくて、泣き虫。この遠征中、夫の曲さんは日本へ出張、思い出しては涙を流す。独特のアクセント「食事ですよー」をまた聞きたい。



管 理 孟天立
四川省登山協會連絡官



管 理 高 敏
四川省登山協會連絡官



スポートレーナー 張德政
國家體育委員會成都運動創傷研究所



報 道 单 援 助
成都电视台特別報道部記者



學 術 王 明 龍
中国科学院成都地理研究所



學 術 劉 源
中国科学院成都地理研究所



コック 錢書根
四川省体育委員会招待所



コック 李忠全
四川省体育委員会招待所



教 練 芦 秋 吉
松潘県体育委員会



管 理 馬 再安
松潘県体育委員会



管 理 馬 進剛
松潘県体育委員会



管 理 馬 進勇
松潘県体育委員会



管 理 馬 興実
松潘県体育委員会



隊 員 松館 正義
出発1ヶ月前に負傷、参加
を断念した幻の隊員。準備
段階では隊への貢献度NO.1。
豪放磊落、得がたい存在、
一人で隊の雰囲気を盛り上
げる影響力大。包丁さばき
も鮮やか。腹の出ぐあいで
は、八木原と好勝負。

IV 隊員紀行

▼ヤクを乗りこなすチベット族。





▲C 1より眺めた岷山山脈。

処女峰に登った女傑

王 馬特

8月6日、岷山山脈の最高峰が、中日聯合登山隊の隊員達によって征服された。中日聯合登山隊の隊員たちが岷山山脈最高峰一雪宝頂の頂を踏んだその時、頂上には歓声がこだました。その歓声は、あたかも悠久の深い眠りについていた岷山の雪を揺り起こすかのようであった。

この喜びの歓呼の中に、色白の美人が一人いた。彼女の意志と果敢な精神は、この登山隊の力量を増加させた。その彼女とは中日聯合登山隊隊員—三好喜代美である。

今年29歳の三好喜代美は、日本の群馬県に生まれ、穏和な家庭で成長、長じて教師の道に進んだ。

日本においては、大衆的な登山活動が普及している。大学の登山活動の外に、中・小学校では、教育の一補助手段として“登山旅行”を行っている。それは「野外教育」と称されている。学校が登山を組織し、学生がテントや食料を背負い、教師の引率のもと、郊外の野山にいき、大自然の中に身を投げ出すのである。教師はこの機会を利用して、生きることの大切さと自然を愛する教育を行う。同時に、地理や動植物、生態環境の教育も行う。

幼年時代の三好は、この様な野外教育の中で啓発され、登山が好きになっていったのである。山々が連なる群馬県は、その心を開き、三好の登山の初期の目的を満足させてくれた。彼女は、休みを利用してはいつも登山に出かけた。群馬県の山々を征服し終わったとき、彼女の探検は、更に高い富士山へと向けられた。その富士山も登り終えた三好に、新しい欲望が芽生えてきた。そこで、日本第一の探検組織であるヒマラ

ヤ協会に加入した。彼女は誇らしげに私に言った。『私は山が好きだし、探検が好きです。それは、探検が人の意志を鍛えてくれるからです。そして、探検にとって大切なことは、生きて帰ってくることです』

雪宝頂を征服するために、三好は日本側の登頂メンバーに加えられ、数ヶ月前から訓練や準備を開始した。

7月27日、中日聯合登山隊一行は四川省省都の成都を出発し、4日の長旅の末やっと、松潘県の東60kmにある雪宝頂西壁の麓に着いた。ここは海拔4170m、典型的な高山気候で天気の変化が激しい。

三好は興奮した眼差しで、遠く岷山の主峰を眺めた。雪宝頂は太陽のもとで光輝き、あたかも、眠る氷雪の女神が、登山者の足音を静かにじっと待ち望んでいたかの様であった。

8月1日、中日聯合登山隊員14名は、各自30kg近い荷物を背負い、登山を開始した。危険なガレ場で、上から飛んできた石が三好の足に当たり、数ヶ所傷を負った。私は彼女に、どうですか、とたずねた。彼女は『だいじょうぶ、行けます。もうすぐ稜線に出ます。さあ、前進！』三好の話を聞いて、この危険の続く中で、女性の身でありながら恐れを知らぬ、何と楽観的な精神であることかと、感服せざるを得なかった。

8月5日と6日、13名の聯合登山隊員によって岷山最高峰は征服された。『勝利万歳！中日両国人民の友誼万歳！』

この歓声の中で、三好は感激の熱い涙を流した。この涙は、雪宝頂の白雪が融けた透明な一滴のようであった。

（「体育愛好者」より 訳：福山 信）

今晚、成都電視台から「中日聯合雪宝頂登山」が放映されるというので、私は朝から苛々として番組が始まるのを待っていた。夜の7時20分ごろニュースが終わって画面に「征服雪宝頂」の文字が映った。

— 天を刺す姿の美しい雪宝頂を背景にした海拔4100M のベースキャンプには中日両国の国旗が翻っていた。緑の草地のベースキャンプ地では安全登山を祈って、地元チベット族の人達が見事な踊りを見せている。中日両国の隊員が一步一步頂上を目指してアタックしている勇姿。登頂に成功して歓喜する隊員達。ベースキャンプ地での遠藤隊長と王華山さんの柔道の試合風景。八木原さんが下山に際してキャンプ地付近を清掃する姿。 — 番組が進むに連れて私の脳裏には、今夏体験したこの登山のことが走馬灯のように蘇っていた。



▲立つ鳥、後を濁さず。(8/8)

* 初めの印象 *

私は今回の中日合同の雪宝頂登山隊に通訳として参加した。7月25日夜の9時半頃日本側の隊員は北京から飛行機で成都に到着した。私も飛行場まで出迎えに行った

が、初めて日本の隊員に逢って嬉しいよりもがっかりした。と言うのも登山を知らない私が普段想像していた山男は、勇ましい男ばかりであったが、今回の隊員は、老いた人や眼鏡をかけてひ弱そうに見える人もいた。また、女性もいたのであった。私は心の中でこのような人達は登頂するもんか！と思った。

草原のトイレ

7月27日朝8時前に私達は成都を出発した。生まれて初めて山に行く私は、見る景色が全て珍しく、日本の隊員と同じようになるで異国に来たような感じであった。私達を乗せたバスは、午前中は成都郊外の街の中を走っていたので、トイレも気にならなかった。午後は、山を越え川を渡り、草原をひた走り気分は爽快だったが、おなかは苦しかった。なんといっても山の中や草原にはトイレが全然無いのだ。紅原高原に近付いた頃もう我慢が出来なかった。このとき隊員の誰かが「トイレタイム」と言ったのでバスは停車した。私は、心の中で助かったと思いながら急いでバスを降りた。周りを見るとトイレは何処にもない。広い草原には家どころか隠れる場所すら無い。困ったね。この時、バスの後ろの方から音が聞こえるので、思わずそちらを見てびっくりした。男の人は皆バスの後ろで用を足していた。やっぱり男の人は得だね。幸いにも隊には女性の三好さんがいた。三好さんは私を誘って「一緒にいきましょうか？」彼女に従ってトイレを探しに行った。私がみれば全くトイレは無く不可能に見えたが、三好さんは、低い木の後ろを指さして、あそこが良いのじゃないか？と言って何気

ない態度で済ませた。私は、あちこち見ながらこわごわ屈んだ。山の生活が大変苦しいのを初めて知ったのである。何日か過ぎると段々なれて、低い木や大きな岩など隠れることの出来る所は全部トイレに早変わりした。

▼トイレタイム！(7/27)



テントの生活

私は、テントに寝るのが初めてなので、どうしても慣れなかった。隊の女性は三好さんと二人なので、私達には一番小さいテントが割り当てられた。ベースキャンプでの最初の夜は高度障害で一晩中眠れなかつた。隣のテントから聞こえてくる凄い鼾が煩わしかつた。御陰で高所の夜は長いという印象を受けた。また、朝起きてスラックスをはくのが大変だった。まず膝まではいて、それから膝まづいて腰まで引っ張る。慣れるまでは、はくまでに汗が出るほど疲れた。三好さんはよく4900Mの所まで荷揚げに行ったので、毎晩靴下を脱ぐ時「御免なさい。臭いですか？」と恥ずかしそうに言った。テントの中にはその匂いがこもっていた。

今回、私は普段使っている化粧品やクリームを持って行ったが、山の生活は都市の生活と全然違っていた。時々朝寝坊したか

ら、顔も洗わずに朝食を食べた。というのも高所の朝はとても寒いから、ご飯は見る見るうちに冷たくなるので、早く食べなければならない。また、高所の空気は乾燥していて風も強かった。顔の皮膚も乾燥してしわだらけになった。こんなおばあさんのような顔を見ると、化粧する気が全くおきてこなかった。しかし、休みの日はゆっくり顔を洗いクリームをつけて、口紅までも使つた。このことを私と三好さんは「グーニヤンする（グーニヤンとは娘）」と名付けた。どこへ行ってもグーニヤンはグーニヤンだね。

山の生活はとても苦しかつた。毎日缶詰ばかり食べていたので、果物や野菜を食べる夢を見たこともあった。ある日、マネージャーの孟さんがチベット族の人から大根を買ってきつた。この新鮮な大根を見ている内に無性に食べたくなってきた。孟さんが見ていないので一切取つて食べてしまつた。手で口をふきながら嬉しそうに「おいしかったですね」と感嘆した。電視台の单さんが「何ですか」と聞いたので「大根ですよ」と答えながらもう一つ取ろうとしたところ、孟さんが「駄目！」とかんかんに怒つた。テントに戻つてこの一件を思い出すと、たつた一切れの大根の為に大勢の人の前でひどい口調で叱られたことが、悲しくて涙がボロボロと落ちた。悪いのは私なのだが……。

英雄（オトコ）は酒に倒れる

8月5日と6日に、中国側の5人と日本側の8人は様々な困難を克服して、到頭未踏の雪宝頂の頂に立つた。ベースキャンプには歓声が沸き上がり、遠藤隊長と鄭副隊長は握手を交わし、お互いに「おめでとう」を何回も何回も言い合つた。ベースキャン

プではありったけの料理が並べられ祝宴が張られた。パーティの最中皆は大喜びで乾杯を重ね、お酒の世界に浸った。

到頭張さんは倒れた。張さんは、中国登山協会の連絡官である。大柄でとても男らしい男だった。今回の中国側隊員の中では、彼が一番登山経験が豊富で登攀副隊長だった。もちろん彼も登頂した。普段いくら男らしい男でも、あんな高所で沢山のお酒を飲むのは大変な事だ。彼は吐いたり、息が苦しそうで私は心配した。実は普段の私はお酒を吐いた匂いは大嫌いだがしかたなくて彼の世話をした。彼は最後に酸素を吸ってやっと静かに寝た。彼の事を見ながら、もう一人の英雄（オトコ）は、お酒に倒れなかつたことを思い出した。八木原登攀隊長だった。松潘に着いた時、松潘県人民政府は登山隊を歓迎するための宴会を開いた。この時、八木原さんは「私は登山のために中国へ来たのではなくて、おいしいお酒を飲むために来たのです」と言った。彼の話に乗って、松潘人民政府の人は何回も何回も乾杯を勧めた。宴会が終わらない内に彼はもう酔っぱらいになっていた。

松潘にいるとき、私は三好さんと一緒に部屋であった。宴会が終わってから洗濯を行った。部屋に戻ると三好さんはもう寝ていた。私は「済みません。遅くなりました」と言いながら洗濯物を干した。突然、妙なことに気が付いた。三好さんは今まで鼾をかかなかつたが、今晚はどうしてこんなに凄い鼾をかいているのか？三好さんのベッドに近付いて見てびっくりした。寝ているのは三好さんではなく八木原さんだった。私は、悲鳴を上げて部屋から飛び出した。彼は自分の部屋も判らないほど酔っぱらっていたのだった。翌日彼は二日酔いで起き

られなく、食事も出来なかつた。

八木原さんは日本の有名な登山家だと聞いた。けれども最初逢ったときは、こんなに太めで登山家になれるものか！と心の中で疑問に思つた。山に入ると彼はさすがに経験豊富な登山家だと言うことは判つた。今回彼は、登攀ルートを選んだり、作つたりして大変苦労した。中国の5人が全員頂上に立てたのも彼の御陰でもつた。

▼三段腹の登山家。(8/9)



もともと山男は、だいたいが野蛮な男だと思っていたが、実はそれは彼らが自然の厳しさと戦うときは勇敢でなければならないのだ。それを野蛮と誤解していたのだ。山男には優しい面が沢山ある事を知つた。特に八木原さんには好感を持っている。ベースキャンプに入るとき、車は大行郷まででそこから徒步であった。海拔3000M以上の道を歩くのは大変だった。一步進んでも死ぬほど疲れた。その時、八木原さんと歩いていたが、彼は私の荷物を背負ってくれたり、歩けない時は彼のザックのひもで引っ張ってくれて前進した。無情の人は必ずしも英雄ではないが、いくら英雄（オトコ）でもお酒に倒れる事もあるのだ。

遠藤隊長は、学校に勤めていてとても優しい人だった。特に話は上手で原稿が無く

でも、いろいろな素晴らしい話が出来た。登山隊の中でも隊長は一番年上で、中国隊員は頼もしげに彼を「ローダイ」と呼んだ。(ローダイとはおじいちゃん)初めは隊長の年齢が50何歳と聞いたので、なぜこんな年になんでも山が好きなのか全然理解出来なかつた。時間が経るに従つて段々と隊長の心が理解出来るようになった。

ある日隊長は「羅さん一度ベースキャンプよりもうちちょっと高い所へ行って来たら今晚必ずよく寝られるよ」と教えてくれた。そこで隊員について山を登りに行つた。登つて登つて4500Mの所まで行つた。その先のルートはとても険しい。だがそのことは知らなかつた。隊員の後ろについてまた登ろうとしているとき、李慶さんと張さんに見つかり彼らに厳しく止められた。がっかり

したが止めるほかなかつた。実はどうしても帰りたくなくて、じつと隊長達の登る姿を見つめていた。

特に遠藤隊長の姿に感動し、今でもその姿を忘れることが出来ない。寒い風の中を隊長は何日もひげを剃らなかつた。そのひげが霜にぬれて白くなり、その姿に真剣さと粘り強さが現れていた。彼は一番後ろで歩いていたが、やはり精一杯頑張つて一步一歩登つて行つた。隊長の後ろ姿に目を向けながら、この険しい山道は人生の道と同じではないか?と思った。隊長は幾ら年を取つても自分の努力を止めずに、頂上を目指している。人間は皆が頂上に立てるものではないが、それに向かう途中の努力は人生の楽しみ、人生の素晴らしさではないか?とふつとそう思った。



▲BCで放牧のチベット族と談笑する隊長。



▲隊長は、下山も一番最後。前は羅。(8/8)



◀雪宝頂ともお別れだ。(8/8)



▶霜にぬれて(?)白くなつたひげ。

タクティクスについて

登攀隊長 八木原 圭明

元来、タクティクスなる細かい計算や思考を要することが全く苦手である私は、雪宝頂の写真を見て、「標高も低いし、まあそれ程難しくはなさそうである。BCからの標高差も約1500M程だから、うまくいけばキャンプを1つ、悪くてもキャンプ2つ作れば、楽に登れるであろう」と先ず踏んだ。

議定書交換の際に、四川省側持参の角度の変わった写真を見て「はい、いただきまーす」というのが私の感想であった。全く問題はない。ルートは2つ程考えられたが、これは実際に山を見てからにしよう。シーズンにより雪の付き方にも差があるだろうから。

しかし、それでは装備や食糧の係が、どういう風に計算し、準備してよいか判らないというので、中岡隊員が一応キャンプを2つ出すことにした大まかな日程表と鋸歯状のグラフを作り、それを基本とすることにした。

キャンプが2つ必要になるかも知れぬ、という考え方には、隊員の高所経験の足並みが必ずしも揃っている訳では無いことからである。経験の少ない隊員にとっては、高所順応の問題と、4100MのBCからの登山の場合、低いとはいえ、BC～C1間の標高差が1000Mというのは少し負担が重いかな?という感じがしたからである。

四川省の成都に着き「山へ入る前に、ルートや登山方法、期間について相談したい」という中国側の副隊長や登攀副隊長から申し入れがあった。私の返事は「ルートは易しい。登山期間は1週間程度」というだけであり、あとはBCに入ってから、登攀隊

長である私が、中国側と相談しながら決定する、というものであった。

しかし中国側は、議定書調印後にも再度偵察を行ったが、かなり難しいという印象を得ており、私の余りに簡単な返事に少し不満気味な顔付きであった。しかし、遠藤隊長からも中国人の副隊長からも、登山活動については全て八木原に任せることから云われていた。

7月30日、BCへ入る。午後ではあったがルートの全容が見えた。今度は「はい、ごちそうさまでした」という感じで、私は長くて5日間と読む。正直な感想から云うと、それなりに経験が有り、普段からまじめにトレーニングをしている体力のある登山家であれば、ルート工作は不要、1日で往復が可能である、と感じた程である。

ところが、私はそれほどの体力が有る訳でなく、日中14名の登攀隊員の安全な全員登頂をもくろめば5日間が必要であろう、と考えたものであった。自信のなさそうな顔の中国側との話合いの中でも「5日～7日間で全登山活動を終了する」というのが私の結論であった。

7月31日、ルート偵察に出かけ、山に近づいて見ると、ひどいガレ場ではあるが、更に強い確信を得た。事実、5日目に日本人4名が登頂、翌日中国人5名と日本人4名が登頂というまずまず大成功と云える結果を得た。

高所順応が完全でなく、登頂しなかった菅野隊員についても、あと数日の猶予を彼に与えれば、間違い無く登頂でき、登攀隊員14名の全員登頂を果たせたと確信している。

1985年夏、飛田和夫隊長率いるH A J - K 2登山隊は、山田昇副隊長ら3名の登頂者を出し、成功裏に終了した。この隊に参加した僕は、登山活動において前半だけの行動で終わり、個人としては全く不本意な結果となってしまった。また、隊全体においても副隊長として余り役に立たず、全く名前だけのものとなってしまい、多くの迷惑をかけてしまった。

そのような状況で、帰国後は何か漠然とした燃え残しの不満足感の中にあり、あわただしい日常生活の中にあった。そして何とかしたいと思いつつ、日々を過ごしていたのだが、この年の暮れ近くになって、翌年の中国・四川の登山計画を知ることとなった。聞けば、日中合同登山隊であり、遠藤副会長が隊長、八木原氏が登攀隊長で、日程は夏の一ヶ月間とのことであった。

中国は以前から行ってみたいところであった。広大なユーラシアの中心に位置する中国。歴史が割と好きだった僕は、すぐに三国志の世界を想った。そんな中国の大地に身を置いて何かを考えてみたいと思った。そして二年も続けて長期間の登山に行けない僕にとって、夏の一ヶ月は正に願ってもないことであった。さらに何よりも思ったのは、名にしおう八木原氏が登攀隊長であるなら、いま一つピリッとしている僕に何らかの活を入れてくれるのではないかということであった。

そのような想いで、この雪宝頂隊に參加した。そしてこの隊に参集してきたのは、H A J 特有の北は青森から西は兵庫までの10名余の仲間達だった。再び同じ志を有する新しい仲間達との出会いであった。新

しい仲間達と一つの目的に向かって邁進している時、それが一番楽しい。また、この仲間達が集まつた時、僕が感じたのは、登攀そのものは八木原氏に全てをまかせれば良い、細かい雑務は僕がやろう、そうすれば必ずうまく行くだろう、ということだった。いくらかの気負いもあったと今は思っているが……。

そうして計画の中に入していくうちにK 2後のモヤモヤとした気持ちは薄れていった。やはり人は何かをやろうとして向かっている時の方が楽しい。改めてそんなことを感じた。

雪宝頂の登山そのものは、割とあっさり登れ、日中合わせて13名が初登頂に成功した。これは総て八木原登攀隊長の確かな経験と計算に基づくものだと思っている。また、合同登山によくある困難さの克服には、遠藤隊長の温厚な事績が大であった。僕もまだまだ未熟ではあるが、隊長や登攀隊長の域に少しでも近づくよう今後更に努力したいと思っている。

ともあれ一ヶ月弱という短い期間ではあったが、遠藤隊長以下、楽しいそして素晴らしい仲間達と中国・四川の夏を満喫してきた。また、中国側隊員及び関係者の暖かい心遣いも忘れる事もないだろう。今回は合同登山の良い面が最大限發揮されたのではないだろうか。ここで培われた信頼と友情を今後も持続していきたいと思っている。それが次の新たなる登山の糧となることを信じて。

中国・四川。海外としては、日本から近くで良い山が多い。再び訪れてみたい大地である。

松潘の名峰、雪宝頂に登頂して

森山 公美丈

20数年前、夏や秋の北アルプスをうろうろしていた頃は、ヒマラヤとか中国の山などは夢の又夢で、ヨーロッパアルプスさえも文字どおり高嶺の花であった。まして、海外の山を初登頂できるなどということは考えもしなかった。

しかし、1972年の夏にヨーロッパアルプスにいき、憧れのマッターホルンやモンブランを登ったのが、海外の山々の魅力にとりつかれるきっかけとなった。その後、アルプスやネパールのトレッキング等に二、三度行くなどして、6000Mの峰に的を絞り機会を狙っていたが、メンバーも揃わず、この種の登山には経験もなく、なかなか実現には至らなかった。

雪宝頂隊員募集の記事を“ヒマラヤ”誌上で見かけたのはその様な時であった。中国の山、高度はやや低いが一つの山脈の最高峰、ちゃんとした名前もある、小さなピラミッド型の山容も美しかった。その上未踏峰とあるではないか。『素晴らしい山だ！自分にも登頂のチャンスがある』一も二もなく参加することを決めた。

今回の山行の準備も私にとっては意義あるものとなった。打ち合せを終わった後、H A J事務所で酒を飲みながら、隊員・会員・事務局の方々との談論風発も興味深かった。みんな本当の山ヤで人間的にも魅力のある人ばかりだった。

それにしても今回の隊は、私も含めて熟年パワーというか、かなり年配の方が多かったのにはいささか驚かされたが、この年齢の高さと経験の豊富さが、今回の登山を最後まで充実させるものにしたのだと思う。実際の登山では八木原さんのタクティクス

はさすがで、これが登頂を短期に成功させた大きな要因となったと考えている。

中国側隊員、スタッフの方々の顔は、今でも目に浮かんでくるし、私にとっては北京、成都よりも印象深かった素朴な味のする松潘の街、中国登山協会訓練基地の広大な敷地と建物、そして楽しかった野外パーティ等今も忘れることが出来ない。

中国の登山も今は国威発揚的な側面が強いが、将来はもっと個人的なものとなり、ポーランドのようにトップクラスのアルビニストを生み出してくれるのだろう。

44歳の私にとって今後海外登山に行くことはあっても、自分自身が初登頂の頂を踏む機会はもうないだろう。

最後に、私が雪宝頂の頂に立てたのもH A Jの皆さんのおかげであったし、私が神戸に住んでいることに甘えて、準備の実務面などで遠藤隊長をはじめ隊員の方々に多大の迷惑をおかけしたことを改めてお詫びいたします。そして、今回の登山を通じて、中国では四川省、北京に、日本では青森から関東一円にも多くの友人ができ、私にとって生涯忘れることのできない山行となりました。



▲松潘の漢方薬露店商。

今回で中国は3回目だった。最初は83年10月から84年1月にかけて行ったチョモランマ登山隊、2回目は、家族全員を連れた北京、上海の旅行、そして今回。

中国の変貌は目を見張るばかりだ。以前に買った人民帽を持って行き、中国人のようなふりをして、北京を一人歩きしてみようと思っていたが、北京空港に着くなり、出迎えにきてくれた私の友人、王逸氏に冷やかされた。「どこのおのぼりさんですか」

3年前はほとんど誰もがかぶっていた人民帽は、北京の街からすっかり姿を消していた。服装も、街の美観も、すっかりきれいになっていた。東京オリンピックを境にして、東京の街が一変したのとよく似ている。急速に中国が近代化されつつあるように思われた。しかし、街がどの様に変わろうとも友情は変わっていなかった。

北京空港までわざわざ出迎えに来てくれた王逸氏は、チョモランマ登山隊の通訳だった。ベースキャンプマネージャーだった私とは、一緒にいる時間も長く、私も中国語を少し勉強していたので気心が知れたのかもしれない。帰国後も、手紙のやりとりを続けていた。中国登山協会の人間でもないのに、成都へ乗り継ぐまでの5時間も、北京空港であれやこれやと世話をしてくれた。そのうえ帰国の際も、わざわざ北京空港まで見送りにきてくれた。現在、北京の外国语学校の先生をしている。

また、チョモランマ登山隊の管理員だった顔金安氏にも3年ぶりに再会できた。北京の登頂祝賀会で私を見つけた彼は、人懐っこい顔で握手をしてきた。片言の中国語で雪宝頂に登れたことを報告すると、自分

のことのように喜んでくれた。今は、中国登山協会の弁公室副主任をしているそうだ。

思いがけなかったのは、王鳳桐先生に会えたことだった。成都から北京に戻ってきた夜、中国登山協会招待の祝賀会があった。招待側が並んで迎えてくれるなかを、隊長を先頭に我々日本隊が入場するとき、中国側のトップに懐かしい顔を見いだした。まさかと思った。でも間違いない。老王だ！本当に嬉しかった。中国での登山のやり方だけでなく、様々なことをあのロンブク寺で教えてくれた連絡官だったのだ。中国における私の“老師（先生の意）”である。その老師から登頂証明書を手渡された時は、まるで、卒業証書をもらう生徒のような気分だった。

もちろん、彼らが私を友人や生徒と思っていたくれるかは知らない。私の一方的な思いかも知れない。それでもいいと思う。まず私からそう思わなければ、人のつながりはできないと思うから。

今回の登山では、古い友人に会えただけでなく、新しい友人もできた。BCで一緒に暮らした20人の中国隊員やスタッフの人達だ。一人一人の顔が浮かんでくる。時には意見の違うときもあった。片言の中国語のため、うまく表現できなかったために、彼らに気まずい思いをさせた事もあったろう。それは、これからも中国語を勉強することで、補うしかない。

今後、もう二度と会うこともない人もいるだろう。しかし、また、北京や成都に行った時、人混みの中に彼らを見いだそうと必死になっている自分を想像するのも楽しいものだ。

「ブッ」やった！ 目の前が真っ暗。これで中国行きは「バー」と思うと、いま切ったアキレス腱の痛さより中国に行けない悔しさが頭の中いっぱいに広がっていった。6月16日の18時、会社の体育館で、今年入った新入社員を相手にバドミントンをしていての出来事だった。年甲斐もなくハッスルし過ぎた結果である。翌日入院、そして手術。その後は順調で現在はすっかりよくなった。

H A J の会報で雪宝頂遠征を知り、憧れの中国に自分の体力年齢にあった遠征ができると勇んで参加したのだが、出発1カ月半前にしてメンバーの皆さんに大変迷惑をかけた。

遠征には参加できなかったが、私には貴重な体験と財産になった。鳥海山より南の山に登ったことのない私には、3月の八ヶ岳、5月の富士山の合宿はまたとない体験だった。3月の八ヶ岳では、テント場が満員なのにびっくり（田舎では、いつも貸切り）、あれくらいの雪が降ると東京も東北よりも暮しにくいのに又びっくり（茅野から東京まで12時間以上かかった。青森よ

り遠かった？）、5月の富士山では行き帰りの人の多さに又びっくり。

このような準備期間を通じて、テント内でのメンバーとの交流、H A J ルームでの一杯飲み会は、地方出の私には、大きな力づけになり、このメンバーでの遠征の成功を疑わないものにしてくれた。

しかし、一番忙しいときに入院してしまい、メンバー並びに H A J には大変迷惑をかけてしまった。それなのに、入院中は励ましの手紙や電話をいただき大変感謝している。又、遠征中の多忙な中からお手紙をいただき、ベッドにいながら行動中の様子が判り、私も一緒に遠征している気分で、同室の人達をうらやましがらせた。

8月9日に退院し H A J に電話したところ登頂成功とのことを聞き、大変嬉しかった。9月に H A J ルームでみんなにお会いでき、雪宝頂の話を聞きスライドを見せてもらったときは、自分も行ったような気分だった。

今後、チャンスを作って、できれば同じメンバーで遠征したいと思う。

▲八ヶ岳合宿。左より
天城・松館・菅野・森山



◎蝶◎

少年の頃、私は蝶々採りに夢中だった。保育社の原色図鑑を買ってもらい、片っ端から名前を覚え、野に草原に網を振っていた。今から思えば残酷だが夢があった。しかし中学に上がる頃にはこの趣味は終わっていた。

遠征で、思いがけず20数年ぶりに捕虫網を握った。最初は捕まえた蝶の胸を押して仮死状態にさせ、三角紙に入れるのにも戸惑いを覚えた。でもすぐに昔の感覚が蘇ってくる。飛んでいる蝶を見て、あれはタテハ、あれはシロチョウ、あれはヒョウモンと見分けもついてくる。瞬時に網を合わせるテクニックもなかなかのもの。日本のもとのとの異同もなんとなく分かってくる。網を振って高原を走る。少年の日々だ。

でも少年の頃は気づかなかったことが一つ。美しい蝶を自分の網に収めるって、妙にセクシュアルなことなんだ。

◎裸 馬◎

学生時代、喧嘩の東京から逃げ出し、一人北へと旅をして、北海道日高の牧場にたどりついた。朝早くから馬の世話をし、草を刈ったり運んだり……。きつくなかったが新鮮な労働の日々だった。

サラブレッド生産の牧場だったが、道産仔を一頭飼っていて、仕事が終わってからみんなで乗り回していた。私も簡単な手解きを受けて乗せてもらった。手綱はあるが全くの裸馬で棒切れをムチ代わりに、広い牧場を走り回る。下手くそな私が乗れば、どこへいくのも馬の気分次第だし、よく振り落とされていたが、大変壮快だった。

今回、ベースキャンプと大塞郷で、馬方

の青年にせがんで、久しぶりに裸馬に乗せてもらった。首につかまりはずみをつけて馬に跨り、手綱とたてがみをつかみ、内ももに力を入れて、馬の背を挟むように乗る。馬との対話には言葉のハンディはない。腹を軽く蹴れば馬は走る。雪宝頂を背に前に、馬上の私は得意満面。走る。スピードを上げる。ブレーキをかけようか、いやこのまま飛ばそう。スピードが上がるにつれて、力をこめる内ももに馬の体温が伝わってくる。束の間の人馬一体の幸福な錯覚。

それにしてもあの馬たち、大塞の人たちが苦労して育てている畠の大麦をバリバリとうまそうに喰っていた。

◎少 年◎

その少年は、大塞郷を流れる清流のほとりに現れた。釣りをしている私を見て、しばしいなくなったと思ったらシマドジョウのような小魚をぐちゃぐちゃに握りつぶして、ニユッと手をさしだした。見たところ何の道具も持っていないのだから手掴みだろう。ドギモを抜くご挨拶だった。

川はなかなかの渓相で、いくつものポイントをつくっていて、時々、魚影も見えるが、私はポイントを見て餌を流す。しかし少年は「あそこだ」と指をさす。はたして、そこからは必ず魚が飛び出してくる。彼の目には魚が見えているのだ。釣り登るうちに茂みの中でごそごそ音がして、小鳥が走る。彼はいきなり突進する。まさかと私は釣りに熱中する。2~3分後、かの少年、血まみれの小鳥をニコッとして差し出した。私は一種の恐怖感すら覚えて、まじまじとそのあどけない少年を眺めた。それは野生の力への本能的な恐怖感だったのだろう。

今回の登山は、私にとって初の海外登山だった。チームを結成してから、出発までの準備では、海外登山では何を必要とし、何を為さなければならないのか、自分の備え、隊の備えなど、全て新しいことだった。私の任務は、装備と記録だったが、何と言っても前記の通りだったので、マネージャー的存在の中岡さんにおんぶする形で勉強していった。だから、中岡さんを始め他のメンバーの皆さんには大きな負担となつたに違いない。お陰で、ひとつの勉強になり、ひとつのステップを踏めた。先ずは皆さんにお礼申し上げたい。

中国は初めてだったが、一般旅行者が入れないチベットの奥に行けたことも大きな収穫だった。紅原高原の広さ、そこに生きるチベット族の遊牧、ヤクや羊の群れ、馬を使う人々、その生活と人情も忘れられない。幸いにして、天候に恵まれ、4100Mのベースキャンプの設営とルート工作、アタック、キャンプ撤収と特別の支障もなく進められたことは天の恵みと感謝している。心配していた高所障害も特に大きなものもなく、自分としても、初めての4000M以上の活動ながら、良く行けたものと思っている。登頂はできなかったものの、4900Mの自己最高到達点を得たことも大きな収穫だった。

何より驚いたことは、4000M以上の地にエーデルワイスが咲き乱れていたことだった。この自然、又、チベット族のあの人なつっこさ、こうした毒されずにあるものを、どう見守っていくのか、日本の山々のある時期の悲惨極まる姿を振り返り、どう見守り、どう近代化を進めるのかと考えさせら

れる。

遠征というものの実際、その長期に渡る準備、仲間としての人間関係など、様々なところから教えられ考えさせられ、今後の私にとって、ひとつの視野が得られた登山活動だった。その点で、収穫の多いものだったと思う。

何よりも、中国四川省の皆さん、初めから最後まで労を取って下さった多くの人達一人一人にお礼を申し上げる。



▲野菜も豊富な松潘の自由市場。

頂上に立つと、北東の方向に朝日が見えた。8月5日、8時10分私は雪宝頂の頂上に立つことができた。青い空、はるか地平線まで続くこげ茶色の山並。あこがれを持って想像していた景色が足下に広がっている。この景色は多くの人々の協力の上に見ることができたのだ。ほんとうに感動的な一瞬を体験できたことを関係者のみなさんに感謝したい。

中国の関係者にもお世話になり、親切にしていただいた。中に少数民族の方も少なからずいた。東北の田舎町に住んでいる私には「少数民族」という言葉は異文化を感じさせる魅力がある。

チベット族、回族、羌族という3つの少数民族について今回知ることができた。それらの民族の印象を簡単に語りたいと思う。

チベット人で印象に残っている一人として、私達が「本官」と呼んだ警察官（？）がいる。松潘を去る前夜、パーティで酔つて気持ち良さそうだった。福山さんと同年齢ということだったが、無邪気そうな表情が印象的だった。「明日は正装してあなた達を送る」と言っていたが、翌日は普段着のままだった。全く人の良さそうなおじさんだった。

（松潘県一帯に住むチベット人は、西潘語というチベット語方言を話す集団である。その生活様式は、農耕が主体でハダカオオムギを栽培しているようである。阿坝藏族自治州には、その他に北西部に住むジャール語というチベット語方言を話す集団もいる）

松潘からの荷物輸送には馬を利用したわけだが、その管理をしてくれたのが回族だ

った。BCへ登る最後の坂では、あえぎながら登っている私を見て、馬のしっぽをつかませてくれたのが回族の青年だった。そのおかげでなんと楽に登ることができたことか。

（元々は中央アジアにいたイスラム教徒が、元代以降多数中国本土にやってきた。彼らの人種はトルコ系、アラブ系、イラン系と多様であるが、千年以上もの中国での生活の間に漢族の血が混じり、言語、風俗もすっかり漢化してしまった。外見上は漢化したが、イスラム教を信仰することで共通意識を持ち、一民族として認められるに至ったものが、回族と呼ばれているのである。）

羌族という名を初めて耳にしたのは、松潘県人民政府主催のパーティの場であった。そこでは少数民族による歌や踊りが披露された。各民族とも民族衣装に身を包んでいたが、とりわけ羌族の女性は美しかった。日本人に似た顔が特に印象に残っている。

（漢代頃から、青海省を中心に中国西方辺境一帯に住んでいるチベット系遊牧民は羌族と呼ばれていた。羌という字は「羊+人」から羊を放牧する人、を意味している。彼らの一部は四川省の岷江上流に居をかまえた。これが松潘地区に住む古代羌族の祖先であると考えられている。また、古代羌族の一部は西へ向かい、チベット人の元祖となつた。）

少数民族については、もっと詳しく知りたいと思う。今回の遠征では、少数民族のこと興味が持てたことも私にとって有益だった。

日中合同登山隊

三好 喜代美

成都に着いた時、フラッシュとともに、テレビカメラが我々を迎えた。慣れていないせいか少々恥ずかしかった。合同登山ということでマスコミも大いに盛り上げているのだろう。実際登山隊に電視台の人も参加したのだから。

その後も、成都では歓迎会が催されたり、とにかく大々的だった。私は山を登ることが第一目的だったので、多少面喰らったり、驚かされたりした。山に登る行為以外で、より重要なことも多いのだろう。

この様なパーティは、松潘でもあり、また、大々的に歓迎してくれた。もう街総出で準備してくれて、それは大変だったと思う。乾杯の連続で、私達はベースキャンプに到達する前にお酒に飲まれている感じだった。こういう席には必ず、角びんに入った蒸留酒が出された。アルコール度は60度以上あり、火をつけると良く燃えた。それを一気に飲み干すのだ。この酒は高いものらしく中国では一般の人はなかなか飲めないらしい。私は匂いが鼻についてなめるのが精いっぱいだった。

料理もバイキング方式で次から次へ出される。円卓に6人ぐらい座り、15~18皿は出たと思う。中国の人は良く食べる。あれでおなかをよくこわさないものだと感心した。よく食べ、よく飲み、よくしゃべる、実際にぎやかだ。中国語は日本語に比べてにぎやかな言葉なのだろうか。

中華料理は何でも調理してしまうというが、鶏の足が皿にのせられたときには、本当に困ってしまった。北京での登頂パーティの時、私のとなりに座ったCMAの方が、私にとってくれたのだ。見ただけで手がつ

けられなかった。

登頂後、松潘に戻った私達をこの人民政府が招待してくれた。何とはなしに人民政府につくと、驚いてしまった。日頃は地味な服装なのに、チベット族や回族、羌族の人たちが、本当に真新しい艶やかな民族衣装を身につけ待っていた。そして日頃お目にかかるないであろう歌や踊りを披露してくれた。会議場らしい一室にテーブルを置き、白い布をかぶせ、花や茶、菓子も用意されていた。最大限の登頂祝いのもてなしと思った。

予定よりだいぶ早く登山活動を終えたので、どの隊員も早く成都へ帰りたいと思っていた。その意に反して、紅原から1日で成都へ帰れるのに途中で一泊。そして成都へ入るという日、直行せず、見学をしたり、道端のたんぽの臍ですかを食べたり。

どうやら、四川省登山協会のスケジュールというのがあるらしく、早く着き過ぎてはいけないらしい。午後3時錦江賓館着のこと。

成都、やっと着いた。たくさんの人達がいる。まさか登山隊を迎える人達とは思わなかった。目に飛び込んできたのは「熱烈歓迎中日聯合雪宝頂登山隊登頂勝利」の大きな横断幕だった。登山協会の方々はもとよりテレビ局も来ている。可愛らしい小学生が生花を一人一人に手渡してくれた。

時間待ちをさせられたこと、汶川で体調を崩したこと、みんなどこかへ行ってしまった。ここにきて登山協会はじめ中国の人達の気配りが良く理解できた。そして我が隊は、やはり日中合同登山隊なのだということはっきり判った。

初めての海外登山を終えて

大金 信夫

ラマ教徒にとって、雪宝頂は吉祥と幸福のシンボルであるそうだ。私にとっても、今回の登山で同様な思いを持つことができたことは、幸いである。

出発前、初めての海外登山ということで、いろいろ不安があった。未知なる高度で、いったい自分はどの程度働くのだろうか？ BCでウンウンうなっているだけで終ったら？ また、戻ってきて職場に机が無かったらどうしようか？ などとしおらしい不安さえ持った。

そして結果的に、気安めでもトレーニングをしたことが成功につながったのかなと思っている。

経験の無い者にとっての心の支えは、少なくともこれだけはトレーニングを積んだのだからという自己暗示以外無いようだ。次の高さを目指すとき、雪宝頂は果して心の支えになってくれるのだろうか？

最後に毒舌な白峰会の先輩へ一言。
『雪宝頂の頂上には、鳥居もなければパンダもいませんでしたよー！』



ご協力者名簿

大変お世話になりました。
おかげ様で、
無事成功することができました。
心から御礼申し上げます。

隊員一同

(敬称略)
株 I C I 石井スポーツ
梅内 忠雄
M T C 2 1
株梶田製作所
越谷 英雄
近喰 司
差波 司
山陽スコット(株)
鈴木 雄一
住本 芳克
泰東製鋼(株)
竹内 幸一
竹森 謙一
(有)ダックス
田中 清子
田中 幸一
田中 瑞穂
株珍味堂
天瑞酒造
株トーモク
林 清剛
富士酒造
宮崎 久夫
森永乳業(株)
雪印乳業(株)
リーハーマン・ウェルシュリー&CO., S.A

編集後記

あの感激から1年がたった。高さはさほどではないが、未知へのロマンは、我々を充分満たしてくれた。その余韻は、心の隅にまだ残っている。

これほどうまくいった合同隊も、そう多くはないだろう。

雪宝頂をステップにして、今度はより高みを求めて、また中国へいきたい。

帰国直後にも、すぐ発行するつもりであったが、やはりだめであった。忙しいということを理由に、ただ、担当の私が、怠けていただけである。

何とか発行にこぎつけられたが、その内容はともかく、編集技術の稚拙さのみ目立つものとなり、申し訳なく思っている。

雪宝頂の頂に立ったときから、次の出発が始まったのだが、各人の歩みは、何が目的とされたのだろうか。たとえ、ルートやペースが違っても、自己の力量を少しでも高みに置くために、不断の努力をしようではないか。

この報告書が、今後も歩み続ける私達にとって、疲れたときの励ましになれば、幸いである。

(福山)

天府の靈峯 雪宝頂

発行日 1987年8月5日
発行人 日中四川雪宝頂合同登山隊
 隊長 遠藤 登
発行所 日本ヒマラヤ協会
 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
 淀橋食糧ビル506号
 TEL 03-367-8521
編集人 日中四川雪宝頂合同登山隊
 報告書編集委員会（責任・福山 佶）

頒布価 1500円

